

---

omance of Three Kingdoms? with Fate ~ 衛宮士郎伝 ~

昼行燈

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R o m a n c e   o f   T h r e e   K i n g d o m s ?   w i t h   F a t e   ー 衛宮士郎伝 ー

### 【Nコード】

N 5 1 0 1 Q

### 【作者名】

昼行燈

### 【あらすじ】

不幸にも事故により恋姫三国志の世界に飛んできてしまった衛宮士郎。士郎は無事生き残ることができるのか！？  
物語は時代背景が正史ベースな恋姫で。恋姫キャラと士郎のからみが主になります。シリアスもあるよ。

## プロローグ（前書き）

士郎、凜は大師父の弟子という設定。

ルートはそれぞれの良いところという事で一つ…

ちなみにセイバーさん含むサーヴァントは皆さんお帰りになられます。

最後に、それぞれの作品を知らない方でも楽しめるとは思いますが、知っていること前提で書いておりますのであしからず。

## プロローグ

一番最初に目に入っただのは広大な青空と点在する白い雲。

体を起き上がらせてみれば周りにあるのは地平線とその先にうつすら見える山脈。

立ちあがって第一に出たのはため息だった。

（あのうっかりアクマめ。またやらかしてくれたな）

エミヤシロウ  
衛宮士郎は広大な平原に立ち、共にやってきたはずの、しかし、姿が見えない相方に悪態をつく。

（油断していた……最近おとなしかったただけに……まさかここでやられるとは）

（遡ること少し前）

士郎がちょうど時計塔に戻ってきたとき、彼の元師匠でもあり、今の兄（姉？）トオサカリン弟子でもある遠坂凜に無理やり大広間まで引っ張りこまれた。

「いいからあんたも付き合いなさい！ちよつとした小旅行よ！」

士郎は有無も言えず、凜の「並行世界から行って帰ってくる」という大師父最後の課題に付き合わされることになった。

「魔術陣OK。魔力OK。ゼルレッチの準備OK」

士郎はせかせかと準備している相方を傍目に、にこにこしながら見ている大師父、キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグに話しかけた。

「あんなんで大丈夫なんですか？」

「なに、心配はいらんよ。もうあれは並行世界の放浪も可能だ。ただ、移動のきつかけとしてゼルレッチと膨大な魔力は必要不可欠だがね」

「……それが俺に一抹の不安を抱かせるんですが？」

「ははは、なぐにすぐにその不安も吹き飛ぶさ」

「……そうだといいいのですが」

「よし！準備完了！士郎行くわよ！ってあんたその赤いの脱いだらどうなの？戦いに行くわけじゃあるまいし」

「まさか！？君と行動するのにこの外套を脱げと！？そんな危険を犯したくないね」

士郎のこの一言に、凜に若干青筋が走る。

「……士郎、あんた最近『アーチャー』に似てきたんじゃない？」

「凜に鍛えられてるからな。これくらいは言わせてもらわないと割

に合わんよ」

「……良いわ。その一言がどれだけ高くつくか覚えてなさい」

そう言ってひとまずこの話題を保留にし、凜が魔術発動の準備に入  
ったため士郎も渋々、若干光り始めた魔術陣に移動する。

「それでは大師父行つてまいります」

「うむ。良い旅を」

凜と大師父のあいさつを聞きながら、ふと陣の一角が目に残まる。

とたん、士郎の顔に汗があふれてきた。滝のごとく。

「なあ遠坂」

「何よ。集中できないでしょ」

「なあ」

「うっさいわよ！あんたは私の最終課題を失敗させたいわけ！？」

「いいからあそこをみる！」

「ん？」

士郎の剣幕に押され指さされた箇所を目を向ける。とたんに凜の顔  
に汗が浮かぶ。士郎と同様に。

「え〜つと。あはははは」

「笑ってごまかすな！」

士郎が指をさした箇所は明らかに陣の他の部分と発光のパターンが違っていた。その場所はよりにもよって大師父の死角だった。

ここにきて遠坂家直伝、『うつかり』が発現した瞬間だった。

「よりにもよってこんなタイミングでかよ！」

「うるさいわね！まだ大丈夫よ！ゼルレッチは振ってないんだから！」

と言って思わず士郎にゼルレッチをみせる。そして、言い凄むともに凜は思いつきり手を下に振った。ゼルレッチを掴んだ手を。

「「あ」「

とどめの『うつかり』に術式が呼応する。

陣とゼルレッチが光を放ち、七色に輝いているそれらは少し歪つな光り方をしていた。

「二人とも」

絶句している二人に大師父が声をかける。

「まあ、きつと、大丈夫だと思うから、たぶん」

今思いつきり不安になるようなことを言われたような気がした。

「いつてらっしゃい。あ、お土産はいいから。無事帰っておいで。祈ってるよ」

大師父のとどめの一撃に答える間もなく、自身の視界が歪んでいくのを土郎は感じた。

「……なんでさ」

このつぶやきは土郎のなのか、凜のなのか。二人はこうして予想外の並行世界へ旅立つことになった。

これがまっとうな旅にならないと、おそらく『うつかり』をした本人以外は覚悟したことだろう。

## プロローグ（後書き）

…眠い。なので第一話は明日以降で。  
ストーリーはある程度できてからすぐ書けるはず。たぶん。  
プロローグなのでギャグチックです。  
あと、ツッコミ大歓迎。

## 第一話 さつそく面倒事（前書き）

基本は恋姫の話を中心にして、正史の話を加えていけたらと思います。

ただ、時代背景とかは正史に忠実でいきたいなあ。

## 第一話 さつそく面倒事

「土郎が荒野に降り立つ少し前」

白昼、見えたのは星。それが分かれて落ちる。

「……流星？不吉ね……」

それもふたつ。ひとつでも不吉だというのに二つならなおのこと。

（天は私に動くなと言いたいのかしら？しかし、不吉も二つとなれば吉とも取れそうだし……）

「……様！出立の準備が整いました！」

「……様？どうかなさいましたか？」

その声に思わず振り向く。そこには最も信頼のおける双子の姉妹が控えていた。

「今、流星が見えたのよ。それもふたつ」

「流星ですか？こんな昼間に」

控えている双子の姉が心底不思議そうな声を上げる。

「あまり吉兆とは思えませんか。出立を伸ばしましょうか？」

控えている双子の妹が心配そうに伺いを立てる。

「吉と取るか凶と取るかは己次第でしょう。予定通り出立するわ」

その声に双子は下がり、兵に出立準備を急がせる。

（あれを野に放っておくわけにはいかない……それに比べればさっきのことなど些細なこと）

そう自分に言い聞かせ、準備の完了した兵たちの前に立つ。

「無知な悪党どもに奪われた貴重な遺産、何としても取り戻すわよ！……出撃！」

自らの発した号令に兵たちが動き出す。隊列を組み進んでいく兵たちをみて吉兆など関係ないと再度言い聞かせる。

しかし、心にぬぐえぬ不安があった。

（あの片方の流れ星……我らの行く先に落ちたような……？）

く士郎sideく

（とりあえず自分の解析くらいは行っておくか。あの『うっかり』に巻きこまれたんだし）

士郎は自分の体調を確かめるように自分自身の解析を始めた。

――魔術回路正常稼働可能

――魔力量正常

――外面身体変化なし

――固有結界使用可能

――身体能力100%行使可能

――投影宝具制限なし

(ん?)

ある一ヶ所に違和感を感じ、その部分を深く解析しなおす。

――最大保有魔力量増大

――魔術『強化』による身体向上力増加

――最大保有魔力量増大により魔術行使能力の向上を確認

(転移の異常が影響したか?というかこれきちんと術式解明したら革命が起こるんじゃないか?)

一体どういう理屈か士郎が扱える魔力量が増えていた。単純な最大

MPアップだが、固有結界が使える士郎にとって、使える魔力量が増えることはすなわち、その分持続時間が向上し、結界範囲が広がることを示していた。

（なんにしても朗報ではあるか。『うつかり』ってデメリットだけじゃなかったのか？）

思わぬ異常に胸をなでおろす士郎。しかし、気になることを思い出し『干将』<sup>カンショウ</sup>を投影し、刃を鏡に見立て自身を見る。

（とりあえず髪と肌は元のままか……凜の奴、変なこと言いやがって）

遠坂凜の“アーチャーに似てきた”の一言に皮肉だとわかっていても思わず見ずにはいられなかった。

（固有結界の反動だったっけか？なるべく使わないようにしないと……）

そうして『干将』を破棄しようとしたその時、

「おう兄ちゃん。珍しいモン持つてるじゃねえか」

声に振り向くと、そこには元来た場所では映画でしか見たことのない恰好をした、大中小の三人組がいた。そして、醸し出る小物臭。

（盗人にしたってこれはないだろう）

目の前の現状に思わず大きなため息をつく。それに何を勘違いしたのか、上機嫌になったリーダー格（中）の男がへらへらと話しかけ

る。

「まあそう気を落とすなよ。何も命まで取ったりはしねえ。俺たちはお宝を手に入れて気分が良いんだ」

士郎が伏せた目を開けた時、男の懷からあふれる膨大な魔力に目を奪われた。

「手に持っている剣と金目のモン置いてい……」

「貴様の懷に持っているものはなんだ？」

「あん？」

男は士郎の態度が変わった（と思っている）ことに呆けていた。

「もう一度言う。懷に持っているものはなんだ？」

「てめえアニキになんて口聞いて……」

「まあまあ落ち着けチビ。強がっているだけだ。話しても減りはしねえんだ」

「あ、アニキがそう言うなら」

士郎の物言いにチビ（小）が食いつくが、よほど機嫌が良かったのかアニキと呼ばれた男がなだめる。

「これはお宝よ。なんでも『世の理が全て分かる』つつうすげえ書だ。きつと高値で売れるぜえ」

「そうか、それは良いな」

「だろう！？いやあ蔵から盗むのに苦労し……」

「置いていけ」

「は？」

自らの手癖の悪さを堂々と語ろうとした男は、士郎の一言に今度こそ呆けた。

「またか？その書を置いて失せろと言っただ」

「ふ、ふざけてんじゃねえ！」

「やれやれ、分不相応なものを持つことは身を滅ぼすぞ」

「てめえ……今の状況が分かって言ってるのか？三対一だぞ？」

士郎の態度にキレ始めた男に続くように脇の二人が前に出る。その姿に士郎がやれやれとため息をつく。それが止めになった。

「もうやっちまいましよう、アニキ！」

「そうだな。バラして身ぐるみ剥いじまおう。おい、押さえろデブ」

「んだ」

三人組は自分たちが優位と思い込んでいるらしく、デブ（大）が悠

長に士郎を抑えにかかった。

「ふう、これだから力のわからない小物は」

「なにをいつてるだあ〜？」

「こういつことさ」

「!？」

士郎を掴もうとした手は空を切り、次の瞬間デブが前のめりに崩れる。士郎のエルボーがデブの首を直撃した。

「!？てめえ!!」

「よくもデブを！」

「まだわからないか」

デブがやられたのを見てチビが短剣を持って飛びかかる。士郎はチビの手を弾くと、飛びかかってきたその勢いを利用し、チビを地面に背中からたたきつけた。

「きゅ〜」

「まだやるかい？」

「くっ、こ、こうなったら」

目の前で二人がやられたのを見て、初めて男が焦りだした。そして、

「逃げるが勝ちだああああ」

一目散に逃げ出した。一人で。

（やれやれ。仲間を置いて逃げるのは感心しないな）

（まあ、逃がさないけど）

士郎は弓と矢じりのつぶれた矢を投影し構える。

「ふっ」

「ぎゃあ」

士郎の放った矢が男の後頭部に直撃し、なんとも情けない声をあげ、男がどつと倒れた。

（さすがにこの書だけは見過ごせないな）

倒れた男から飛び出た書物を拾い上げ、続いてデブを小突きに行く。

コツコツ

「……んん？」

「おい」

「ひい」

目を覚ましたデブは目の前の士郎を見て飛び起きる。

「二人を連れてさっさと行きな」

「はいいい!!」

デブはその身に似合わず、風のように二人を抱えその場から去って行った。脱兎のごとく。

（それにしてもこれは一体？）

その姿を見送った後、士郎が本を確かめようとしたとき、

パチパチパチパチ

手をたたく声に本から視線をあげた。

「お見事ですな。三人相手にあそこまで鮮やかに決めるとは。さぞ名のある武人とお見受けする」

そこには赤い槍を携え、白くきわどい装束を着た女の子が拍手をしていた。

（……なんでさ）

今度は多少話せそうな人物が登場したのに、まずその格好にツッコんでしまう士郎であった。

## 第一話 さつそく面倒事（後書き）

何とか今日中に間に合った。結局、士郎の所属勢力に右往左往した結果がこのさまですよ。大丈夫、次話でたぶん合流できる……はず。なるべく2、3日中に次を書きたいと思っています。

## 第二話 1 + 3 - 3 + 大勢（前書き）

諸事情により県令ではなく刺史です。つじつまは合わせますが正史ベースと言ってるのに、すいませんです。

## 第二話 1 + 3 - 3 + 大勢

士郎の目の前にいる少女は心底楽しそうに士郎を観察していた。

「ふむ、手に持った得物といい、さっきの弓の腕といい、目を見張るものがある……が、服装は変わってますな」

「……それを君が言うのか？」

「お？言葉が通じるのですか。これは失敬、失敬」

少女はさも驚いたという口調だったが、表情は崩れていなかった。

「しかし、私の服装が変とは納得できませんな。この服は結構気に入っていますし、何よりあなたの服装も私的になかなか思っていたのですが？」

「ふむ……」

（先ほどの三人といい、目の前の子といい、少し変わった服装がこの世界での普通なのかな？）

士郎が考え込むと、少女の後ろから新たに二人の女の子がこの場にやってきた。

「<sup>セイ</sup>星ちゃん待ってくださいよー。早すぎですー」

「そうですよ。いきなり走り出すのはやめてください。我々はいたって普通の女の子なんですよ？」

(……ほんとうか？本当に普通なのか！？本当に信じていいんだな！？)

その二人も“少なくとも”白い服の女の子よりはマシだが、充分変わった格好をしていた。

片方の子は中華風に仕立て上げたドレスのような服装で頭に人形？を乗っけており、もう片方は眼鏡をかけ、どこかの制服を魔改造したかのような服装をしていた。ちなみに後者はパツと見委員長風である。

「風、稟、お主たち遅いぞ。ああいうのは間近で見るのが良いのだ」

『リン』という名前に思わずびくつと反応する土郎。それに二人が反応する。

「おお、変な格好の人がいます」

「確かに……ずいぶんと奇抜な格好ですね」

(……うん、とりあえずどこかの町に着くまで服装云々は保留にしておこう)

二人の素直な言葉に、なんでさとツツコミつつ、土郎は考えるのをやめた。

「それでこの人が星ちゃんの言っていた『すごい人』なのですか？確か三人相手に大立ち回りをしていた」

「そうそう。最後には弓で鮮やかに決めるまで、まるで演舞を見ているかのようであったな」

「そこまですぐたのですか？私には少々遠すぎてわかりませんが」

「うむ、あの動きは只者ではないと見た。不躰だが、是非とも名をうかがいたい」

二人の質問に白い少女が嬉々として語り出し、そのまま士郎に問いかけた。

「ふむ、名前を言うのは構わないが、聞く前に名乗るのが礼儀ではないかな？」

「これは失敬。私は常山ジョウサンの趙子龍チョウシリョウ」

「程立テイリツと呼んでくださいー」

「今は戲志才キシサイと名乗っております」

（……先生、明らかに偽名の人があります。ってか）

「趙子龍！？」

「ええ、私の名ですが？……それより早く名をお聞かせ願えますかな？」

士郎のまさか！という驚きの声を無視して、趙子龍と名乗った女の子が士郎をせかす。

「あ、ああ、私の名は衛宮だ。衛宮士郎」

「うーん？」

「衛宮？」

「士郎？」

（……まあ、そうなるか。それにしても）

士郎は三人の名前と相手の反応でこの世界がどういうところか理解してきたが、まだ半信半疑だった。

（大師父の顔が若干引きつっていたのはこういうわけか？）

「ふむ、初めて聞く名ですな。あれだけの武芸があれば噂の一つも聞こえそうなものだが……」

趙子龍と名乗った女の子が驚きと不思議の混ざった独り言をつぶやく。

「ああ、すまない。私は違う国から来たのでな」

「なんと！？異国の方だったのですか」

「どおりで変な格好をしてるわけなのです」

「風、失礼ですよ」

「いや、それはいい。それよりここがどの辺か教えてくれないか？土地勘がなくて立ち往生していたところなんだ」

「あ、はい。ここは陳留<sup>チンリョウ</sup>という町の郊外ですね」

「陳留か」

陳留は現在の河南省開封市にあたる。つまり、士郎は凜の『うつかり転移』でロンドンから中国の東海岸まで移動したことになる。まあ並行世界ではあるが。

「ふむ、気になる武人の名も聞けたし、まあ、後のことは……陳留の刺史殿に任せるとしようか」

「そうですねー。でもいいのですか？」

「なに、縁があればまた会えるさ」

「しし？」

「ほら。あれに刺史の旗が」

そう言つて戯志才と名乗った女の子が指をさした。その方向を見れば地平線の向こうから砂煙をあげてやってくる騎兵の一団とその上に翻る旗が見えた。

「……あれか。というか君たちは行ってしまうのか？」

「我々のような流れ者があなたのような異国の方と一緒にいても心証を悪くするだけでしょう」

「是非とも手合わせ願いたかったが、まあ仕方がない。官が絡むとどんなことでも途端に面白みがなくなるので」

「……そうか」

三人は一団が来る前にさっさとこの場を離れたらしく、その様子に士郎は引きとめることができなかった。

「それでは、ごめん！」

「ではでは」

「ああ、気をつけてな」

三人は挨拶をしてあつという間に行ってしまった。士郎にはそれを見送り、間を置かず陳留刺史の一団がやってくる。

（うーん、ロンドンで騎馬は見なれたと思っていたけど、比べ物にならないな）

士郎の周囲を取り囲むのは騎馬の群れ。その数は十や二十ではなく、明らかに百を超えていた。

（なるほど、これは面倒だな。それに面白みもない）

さっきの少女の言葉の意味を目の前の状況を見て納得していると、目の前にいる騎馬隊が分かれ、三人の女の子が士郎の前に現れた。

「華琳様！こやつは……」

士郎を見て、左にいた黒い長髪で赤い装束を着た少女（女性？）が、三人の真ん中に立つ黒い装束を着て、金髪でドリルツインテールな少女（今度は間違いない）に尋ねる。

「……どうやら違うようね。連中はもっと年かさの、中年男だと聞いたわ」

その回答受けて、右にいた青色短髪でさらに青い装束を着た少女（女性？赤いのと双子？）が発言した。

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょうか？」

（なんでさ。てかなんでそんな感じに？）

目の前で自分の処遇が相手次第（しかもちょっと不利？）である状況に本日何度目になるかも知れない口癖を心でつぶやき、何事もなければいいなあと儚い願望を抱く士郎だった。

## 第二話 1 + 3 - 3 + 大勢（後書き）

やつと士郎の所属軍が登場。この調子だと凜が本編に出るのは何話になるのか。

投稿ペースは当分こんな感じでいけるかな？まあなるようになれ。

### 第三話 真剣（マジ）で闘り合う5秒前（前書き）

この先話を続けていく上で、出来事のベースは三国志になるべく合わせていきたいと思います。

そのため若干オリキャラ扱いで参戦する武将もいますのでご了承ください。ただければと思います。イメージと違ったらごめんね。

### 第三話 真剣（マジ）で闘り合う5秒前

「そうね……。けれど、逃げる様子もないということは……連中とは関係ないのかしら？」

（連中……。ね。官軍に追われてるってことは、あの三人組の男たちか）

おそらく刺史であろう真ん中の、華琳カリンと呼ばれた子の言葉を聞き懷の書を思い出す。

「我々に怯えているのでしょうか。そうに決まっています！」

「……怯えているというよりは、面喰っているようにも見えるのだけれど？」

「すまないが……」

「何かしら？」

士郎が三人のやり取りを聞いて、ひとつの結論に至り、華琳と呼ばれた子に声をかける。

「君の名前を教えてくださいませんか？いくつか質問したいこともある」

「それはこちらの台詞よ。あなたこそ、何者？名を尋ねる前に、自分の名を名乗りなさい」

（……とりあえずなんとかかなりそうか？）

相手が問答に応じてくれそうで、士郎はほっと一息つく。

「これはすまない。私は衛宮士郎。異国から来た者だ」

「……」

「なんと」

「通りで変わった格好をしている」

（……この外套ガイトウを着てきたのは失敗だったか？）

後悔先に立たず。双子の反応を見ても、今のところ、異国の人間と言って通じることが外套の唯一の利点であった。

「それで？質問とは？」

「まず、自分がなぜ兵に囲まれなければならないのか……理由を聞いても良いかね？」

「それは簡単なことよ。ここは陳留……。そして、私は陳留で刺史をしている者」

「それで？」

「……あなたは刺史がどういうものか知らないの？」

士郎の問答に心底あきれたという声上がる。

「刺史とは街の政事や治安維持、それに犯罪者等を逮捕し、その処罰を務める者のことだろう?」

「分かっているじゃない。なら、今の自分の立場も分かっているわよね?」

「……自分が不審者に見られていたことは理解できるが、その誤解も解けたのだろう?」

「ぜんぜん」

士郎の言葉を即答で全否定する目の前の少女。そして、有無を言わずたたみかける。

「秋蘭シムラン、ここ最近で『異国の者がこの近辺にやってきた』という情報シムランはあったかしら?」

「いいえ」

「ということよ?理解できて?」

「……」

秋蘭と呼ばれた右にいた子の発言で、士郎の立場が一転して悪くなる。周りの兵の視線も物珍しそうなものから、若干殺気立ったものになる。

（まずいな。街に行くのはやぶさかではないが、引っ立てられると  
いうのはいただけない）

「……まだ何か言いたいことがあるのかしら？」

内心焦る士郎の表情に何か感じるものがあつたのか、向こうから発言を促す。

「ふむ、君たちはどうやら誰かを探していたようだが？少なくとも自分のことではないと推測されるが」

「それとこれとは話が別なのだけれど」

「なに、話してもらえれば何か協力できるかも知れないと思ってな。少なくともこのように殺気立たれたくはない」

「貴様！自分の立場を分かつて……」

「いいでしょう」

「華琳様！」

「別に話すことはこちらの不利にはならないわよ、シュンラン春蘭。それに引っ立てることに変わりはないのよ？」

「……そこをなんとかしてほしかったのだが？」

春蘭と呼ばれた左の子とのやりとりに、士郎が思わず口をはさむ。

「なら諦めなさい。我々の情報網に引っかからないという時点ではだ事ではないのだから」

士郎の連行、決定。

「ふう、お手柔らかに頼むよ。それで探してる連中とは？」

「あら？あなたの処遇は変わらないのは分かってもらえたはずだけど？」

（……結局話すつもりはなかったわけか）

まんまとはめられ、自分から墓穴を掘ってしまった士郎だが、それで引き下がることはしない。

「それはそれなのだろう？それでも自称『正義の味方』なんadena。手助けできることならしたいのだが」

「……それは私を馬鹿にしてるのかしら？それとも官を侮っているのかしら？」

「どちらも違う。これは私の信念の問題だ。『個』だろうと『官』だろうと自分のやることに変わりはない」

「へえ……それを曲げることは？」

「我が生涯において絶対はない」

士郎のきっぱりとした発言に少女が興味を示す。

「そこまで言い切るとはね。あなた、なかなか面白いわ」

「お褒めに与り光栄だが、話を進めてもらえるとありがたい」

「そうだったわね。私たちが探している連中は盗賊の一味よ。頭は年かさの中年男と聞いているわ」

「ふむ、それで盗られた物はなんだ？」

士郎は十中八九、あの盗人三人組だろうと目星をつけたが、念のため盗られた物の情報を求めた。

「『たいへいようじゅつのしよ太平要術書』と言われる道教の經典のひとつよ。一見して古い書だけれど、見る者によって内容を変え、その人物の知りたい情報が現れることから『世界の理が全て分かる』とまで言われる神書」

「……それはこれのことか？」

「『『なっ！？』『』『』」

士郎はあくまで確認のつもりで書を見せたのだが、その行動はこの場では少々うかつだった。

「きつさまあ！やはり盗人の一味だったか！」

士郎が出した書を見た瞬間、左から大刀が振り下ろされる。

「くっ！」

士郎はとっさに持っていた干将カンショウで受け流すが、不意打ちとあまりの威力に刀身にヒビが入り、砕けた。

どっ！ごおん

大刀がシャレにならない音とともに地面に大きな穴を作る。その衝撃に周りの兵が数人馬から落ちる。

（……うそだろ？一体どうなっているんだ？）

穴は月のクレーターのような形を作っていた。あきらかに大刀でできるものではない。常識的に見て。

「てええええい！！！」

（まずい！！！）

横に薙ぎ払われる大刀に、倒れた兵を気にした士郎の反応が一瞬遅れる。『干将・莫耶<sup>バクヤ</sup>』の投影は間に合うだろうがダメージは避けられない。

「やめなさい！！！」

少女の一言に、大刀が士郎目前で止まる。

「春蘭、誰が剣を抜けと言った」

「し、しかし」

「次に勝手なことをしたら許さないわ」

「か、華琳さまあ」

「諦める、姉者。今は姉者が悪い」

「うっ」

妹にもたしなめられ、渋々剣を引いたのを見て、ほっと胸をなでおろす士郎だったが、

「しかし、なぜあなたが書を？それは盗まれた書で間違いないし、疑われても文句は言えないでしょう」

もちろん追求の言葉が飛ぶ。

「ちんけな三人組から取り上げたんだ。あまりにも不釣り合いなものを持っていたのだな。それに蔵から盗んだとも言っていた」

「なっ、それを早く言え！」

「言う前に斬りかかったのはそちらだろう？」

「ぐう……」

「あなたの言い分はわかったわ。それで、その三人組はどこに？」

「あつちに逃げて行ったが……もうこのあたりにはいないだろう。逃げ足が速かった」

士郎は三人組の逃げて行った方を指さす。そこには地平線が広がっているだけだった。

「そう……できればこの手で捕らえたかったのだけれど、書が戻っ

ただけ良しとしましょう」

そう言つて書に延ばされた少女の手は……空を切った。

「……何のつもりかしら？」

「簡単にこの書は渡せない」

「「貴様!!」」

士郎の発言に横の二人が声を荒げる。

「理由を聞いてもいいかしら？」

「この書がさつき君が話した通りの物だとして、君がそれを悪用しないとも限らない」

「あら？その言葉、そっくりそのままお返しするけど？」

「ふつ、言つただろう？私は『正義の味方』だと」

「それを信じると？」

「自分の『信念』に誓つて」

「そう。いいわ。では私が信用に足る人物であつたなら返しなさい」

「……了解した」

士郎としてもここまであつさり引くとは思つてなかったため、少し

拍子抜けした表情であつた。

「さて、とりあえず引き上げましょう。ああ、春蘭。この者を引立てなさい」

「はっ！」

「……結局こうなるのか」

嬉々として士郎を抑える春蘭を横目に、士郎はつぶやく。

「それはそれと言つたでしょう？書に手は出さないから安心しなさい。『正義の味方』さん？」

「っ！？」

華琳は士郎を見て微笑んでいた。しかし、その微笑みは『あかいあくま』のそれと同じものであり、士郎は本能的に身震いする。

（……果たして俺は無事に一日を終えられるのだろうか？）

街に向かう道中で走馬灯のように『あかいあくま』との出来事を思い出し、それと類する恐怖がこの先起こるのではないかと、士郎は街に着くまで気が気ではなかった。

### 第三話 真剣（マジ）で闘り合う5秒前（後書き）

誰か休みをください。とはいえやっ和本編に入れそうです。何とか次でオープニングを終わらそう。そうそう、凜はきちんとこの世界に着いてます。いずれ凜主観の話も書く予定です。……いつになるかはわかりませんが

#### 第四話 うっかりは伝染する（前書き）

お待たせしました。やっとリアルが片付いたので今後は2、3日感覚で投稿できそうです。

#### 第四話 うっかりは伝染する

「なら、もう一度聞く。名前は？」

「衛宮士郎」

「では衛宮士郎。おぬしの生国は」

「日本」

「この国に来た目的は？」

「相方に無理やり」

「……その相方は？」

「行方不明」

「……ここまでどうやってきた」

「事故で。何故あの荒野にいたのかは不明だ」

士郎は街に着いて早々取調べを受けていた。ちなみにこのやり取りはすでに数回繰り返されている。

「……華琳様」

さすがにこのやり取りにも辟易してきたのだろう。質問していた秋蘭が華琳に助けを求めた。

「埒があかないわね。これでは疑いを晴らすのは難しいわよ？異国の『正義の味方』さん？」

「仕方がないだろう。これ以外に答えようがない」

「ふう、本当に埒が明かないわね」

華琳も半ば呆れて土郎の持ち物に目を移す。取り調べのために土郎の持ち物を机の上に並べたのだが……

「あなた……本当に何も持っていないわね」

「あいにくこんな事態になると思っていたのでな。まあ用意させてもらえなかったというのもあるが」

凜本人もすぐ帰ってくるつもりだったのだろう。土郎は外套は死守したが、荷物らしい荷物は持たせてもらえなかった。もちろん凜もゼルレッチ等儀式に必要なもの以外は持っていなかった。

「あなたの相方は何を考えているのかしら？」

「同感だ。できれば本人に直接言ってもらいたい」

「はあ、それでああなたが持っていたものといえば太平要術書以外は……これは宝石なのかしら？見事な細工だけれど、あなたが持つには不釣り合いではない？」

「ああ、それはお守りだよ。かつてそれに命を救われた。それ以来肌身離さず持っている」

「ああ、そういうことね」

士郎が持っていたのは太平要術書以外では、あの宝石のペンダントのみ。投影魔術の使い手である士郎には、特に魔術媒介となる物質は必要ない。

「それで、こんな細工技術を持つ……その日本という国はどこにあるの？」

「おそらく……まだ誕生してすらいらないな」

「「「は？」」」

事実、士郎が取調室にいた文官風の人間にさらっと聞いたところ、「東には海しかない」と返ってきた。おそらく倭国すら確認されていない以上その存在を認めさせるのには多大な時間を要するだろう。

（不毛だよなあ。確認できるまで拘束とかになったらシャレにもならん）

「貴様あ……っ！こちらが下手に出ていれば、のらりくらりとワケのわからんことばかり……！」

さすがに春蘭がキレた。

「いや、お前は下手に出てないだろう」

「なんだと、貴様あっ！」

「はあ……春蘭。いい加減にしなさい」

「……でもお」

士郎のツツコミに、食ってかかろうとした春蘭を華琳がなだめる。

「ああ、ひとつ聞きたいことがあるんだが？」

「なに？」

「君たちの名前を教えてください。今呼び合っているのは字とは違あひなうのだろう？」

士郎がいまいち踏みこめないのはそのせいであつた。陳留刺史で旗の字を見ればその人以外ないのだが、目の前で呼ばれている名前とその人の容姿そのものが確信を揺るがせる要因となっていた。

「あら。知らない国から来た割には真名まなについては知っているのね？」

「真名というのか。知らなかったよ？ただ、うかつに呼べそうな名ではないことは見てとれたのでな」

「当たり前だっ！貴様ごときが華琳様の真名を呼んでみる……。その瞬間貴様の胴と首は離れていると思えっ！」

「……良かったよ。うかつに呼ばなくて」

（昔の俺なら間違いなく呼んでいたな。うん）

士郎はここまで空気が読めるようになるまで数々の苦難を思い出し  
ていた。最初の記憶はそう……セイバーにご飯はないと冗談で言っ  
たあの……

「遠い目をしてるところ悪いのだけれど、名乗ってもいいかしら？」

「あ、ああ。すまない、頼む」

「私の名は曹孟徳。ソウモウトクそれから彼女達は、夏侯惇と夏侯淵よ。カコウトン カコウエン」

「ふん」

「……」

（ああ、やはり）

いまだ警戒心の残る二人の視線を受けながら、士郎は改めて自分の  
置かれている現実をかみしめていた。

「聞こえなかった？」

「いや……ちゃんと聞こえたよ。ちょっと、信じられなくてな」

（だって、この女の子達が……だろ？）

それでも目の前の事実は目を疑うには充分すぎた。先ほどの趙雲と  
いい、英霊となっても不思議ではない、あの武人たちが目の前  
の少女たちだと言われれば仕方がない。

「失礼を承知で聞くが、それは別名や偽名といったたぐいではない

のだな？」

「何を馬鹿なことを。それとも貴様、わたしが父母からいただいた大切な名前を愚弄するつもりか？」

「……悪かった。どうしても確かめずにはいられてな」

（セイバーの正体より衝撃的だな。あちらもたいがいだったが）

士郎は改めて目の前の状況に頭が痛くなる。

「では間違いなく君たちは、魏ギの曹操ソウソウモウトク孟徳カコウトンゲンジョウに、夏侯惇カコウエンシ元讓ヨウサ、夏侯淵カコウエンシ 妙才ヨウサイなんだな？」

「……はあ？」

「……ん？」

士郎の発言に春蘭は「何をあたりまえなことを」という反応をしたが、秋蘭が「おや？」という反応をした。

（ん？なにか変なことを言ったか？）

「……………どういふこと」

華琳は今までと打って変わり、明らかに警戒の目を士郎に向けている。

「……………何が？」

「……どうしてあなたが魏という名前を知っているの？」

「あっ」

（しまった）

やってしまった。なるべく穏便に済まそうとしていた士郎にとってこれは痛恨のミスだった。

「魏の曹操などと……馬鹿か俺は」

「貴様、華琳さまの名を呼び捨てにするでない！しかも、魏だの何だの、意味不明なことばかり言いおって」

「春蘭。少し黙っていなさい」

「う……は、はい……」

ヒートアップしていく春蘭を華琳が黙らせる。

「……信じられないわ」

「……華琳さま？」

「魏というのはね。私が考えていた国の名前の、候補の一つなのよ」

「……は？」

「どういう意味ですか……？」

華琳の言葉に二人がポカンとしている。

「まだ春蘭にも秋蘭にも言ってないわ。近いうちには言うつもりだったのだけれど……」

（こうなっては仕方ないか……まあ自分の失態だしな）

「それを、どうして会ったばかりのあなたが知っているの！そして、私が名乗った曹孟徳ではなく、操という名と、教えていない二人の字を知っていた理由も！説明なさい！」

「まさかこ奴、五胡の妖術使いでは……！」

（……妖術使いね。まあ似たようなことはできるけど）

「華琳さま！お下がりがください！魏の王となるべきお方が、妖術使いななどという怪しげな輩に近づいてはなりません！」

秋蘭の推測に春蘭が吠え、手を大刀にかけ……いや、すでに士郎に突きつけていた。

「……ふう、話すよ。自分の手違いだ。ただ、信じてもらえるか分からないが……」

士郎は意を決して華琳たちに話せることを話す。今後の身の振り方を考えながら……

#### 第四話 うっかりは伝染する（後書き）

……オープニングが終わらない。まさか話も費やすことになるとは。

それでも一応次回にひと段落しそうで良かったです。

遅筆な私ですが最後まで付き合っただければ幸いです。

## 第五話 始まりを告げるもの（前書き）

オープニングはここからです。長くなってしまつて申し訳ないです。

## 第五話 始まりを告げるもの

士郎の話が終わった後、最初に声をあげたのは春蘭だった。

「……で、結局それは、どういうことなのだ？」

「……他の二人はどうだ？信じるかはともかく、私が未来の人間だと理解できてるか？」

「……秋蘭理解できた？」

「……ある程度は。しかし、にわかには信じがたい話ですな」

春蘭の反応を見て、残り二人にも確認を取る。一応、理解はされているようだ。

「まあ、信じられないのも無理はない。自分でもこの事態は想定外だ」

「……あなたにとって過去に来るとは想定してなかったということ？」

「それもある……が」

「……ふむ」

士郎にとって並行世界に大師父と飛んだことは何回かあった。だが経験上、元世界と比べ文明の発展に差があることもあったが、ここまで明確に過去の世界行きついたことは無かった。

「本来なら私たちは……この世界にいるはずの相棒も含め、ここま  
でよくわからない状況にならないはずだったんだ」

「確か事故って言ってたわね？」

「そうだ。術を使った本人がいない以上詳しくは分からないが、転  
移の術式が間違っているのは確認した」

「そのせいで我々の世界にたどりついたと？」

「そういうことになる」

「なるほどね。それで、あなたにとってこの世界はどういう世界に  
なるのかしら？」

秋蘭はまだ少し釈然としていないようだが、華琳はある程度理解が  
できているようだ。

「そうだな……私たちの世界では漢王朝の出来事というのは千年以  
上も昔の話なんだ」

「なにを馬鹿な。そんなことあるわけなかつ」

「あゝ夏侯惇。その理由は？」

「今現に漢王朝があるではないか」

「」「」  
「……」「」

当然だろうと誇らしげに胸を張って答えた春蘭に、周りの三人が呆れて言葉を失う。

「春蘭。今のは彼の世界でのことを言ってるのよ」

「？」

「あゝいつもこんな感じか？」

「すまん。姉者は生粋の武人だな」

「……それが良くもあり悪くもあると」

「理解が早くて助かるよ」

「ん？何のことだ」

「いや、なんでもない。今分かるように話してやる」

まだ『？』を浮かべている春蘭を横目に士郎は話す言葉を選ぶ。

「例えばだな……夏侯惇」

「おう」

「夏侯惇が夏侯淵と一緒に出かけたとする。そしたらいきなり夏侯淵がどこかへ消え、目の前に項羽コウウや劉邦リュウホウが現れたと。もしくは太公望タイコウボウや始皇帝とか」

「……はあ？項羽と劉邦と言えばはるか昔の人物だぞ！そんな昔の

英傑に私が会えるものか。何を馬鹿な例えを……」

「そういつ、馬鹿げてる状態なんだよ。今の私が」

「……………な、なんと」

「確かに、それならば……………衛宮が華琳様の考えていた魏という国の名を知っていたことも、説明が付くだろうな」

「だが……………貴様はどうやってそんな技を成し遂げたのだ。それこそ、五胡の妖術ではないか」

話を理解できた春蘭が確信を突く。本来並行世界の移動などというものは神秘中の神秘。行った先では基本隠し通すのが通常である。もしバレてしまったら、何とかなる場合もあるが、たいがいくることにはならない。

「……………私自身が使えるわけではないがな」

「やはり貴様！五胡の妖術使いか！」

「いや、だから……………ああ、やはり分かってなかったか」

「いい加減にしなさい、春蘭。衛宮は五胡ではないようよ」

士郎の発言にまた春蘭が声を荒げる。しかし、華琳がそれを止める。

「うゝん？では、こやつはどういう奴なのですか？」

「そうね…………『妖術にも似た神秘の力を扱える選ばれた人間』とい

ったところかしら。本来そういう力は隠しておかなければならないけれど、私たちがそれに気づいたから話さざるを得なくなった」

「……本質は違うが、概ねその通りだ。まあ力も秘密にしておくことに越したことはないだろうな」

「むむむ……」

「春蘭。色々難しいことを言ったけれど……この衛宮士郎は、『天の国から来た遣い』なのだそうよ」

「なんと……。こんな見るからに奇妙な格好の奴が天の遣いなのですか？」

（……なんでさ）

二人の言いように士郎が心でツッコむ。

「一応、異国の人間と名乗っていたのだがな」

「天の国でも異国は異国でしょ？それに今回のように力がばれた時でも天の遣いと名乗っていれば妖術使いと間違えられることもない」

「ふむ……胡散臭いのも、ものの言いようということか」

「そういうこと。本当、理解が早くて助かるわ」

とりあえず、これで士郎の身の潔白は保障されることになった。しかし、

「さて、大きな疑問が解決したところで、もつと現実的な話をして  
良いか？衛宮」

「この書を盗んだ奴らについてか？」

「いや、それはもういい。正直、この書が盗まれたのが問題であつ  
て、これを盗んだ奴らにはさりとて重要性はない」

「まあ、これ売り払おうとしてたしなあ」

「はあ……本当、そのことについては礼を言うわ。悪人にでも渡つ  
て悪用されてでもいたら、それこそ目も当てられなかったわ」

「……心中お察しするよ」

さすがに士郎も同情する。価値が分からない人間に盗まれたのが不  
幸中の幸いであった。

「それで……そのことでないなら何のことなんだ？」

「そうそう。あなた、これからどうするつもりなの？」

「そうだな……」

士郎としては何とかして元の世界に帰りたいのだが……

「……帰るにしても帰る術を使える奴がいなければどうしようもな  
いしな」

「確か、あなたと一緒に来たという人がいるのだったわね」

「そうだ。そいつがいなければ私には打つ手がない」

「では、当面はその人を探すことになるのかしら？」

「そうなるな。だが……」

士郎はそこで華琳たち三人を見まわす。

「とりあえず、君たちのところに厄介になろうと思う」

「……なっ!?!」

その言葉に華琳以外の二人が声を上げる。

「あら、誘う手間が省けたわね。探しに出ると言ったら止めるつもりだったのだけれど」

「か、華琳様!?!」

「まあ、このまま逃がすのは惜しい人材ではありますが」

「そちらもそう言ってもらえるなら、こちらとしても助かる。このまま当てもなく旅に出ても、どこかでたれ死ぬのが関の山だ」

「天の遣いを置いておくことは風評的にも聞こえは良いし、何よりあなたの未来の知識は私の覇業の大きな助けになるでしょう」

「それはそうだろうな。だが、こちらとしても条件がある」

華琳が士郎の知識を求めるのは当然のことだ。だが、士郎としてもただ言いなりになるわけにはいかない。

「条件？……いいわ、言ってみなさい」

「ひとつ、扱いは『客将』とすること。ふたつ、人の道から外れることをするなら協力しない。最悪、ここを出ていく。最後に、これは条件というより宣言だが、自分の信念を曲げるつもりはない。以上だ」

「そういえば最初に会った時言っていたわね。『生涯貫き通す信念』があると。具体的にはどうということなのかしら」

「一から十まで全てを救う。可能性がある限りそれをあきらめず、そのために本来救えたはずのものが救えないこともあるだろう……」

ここで士郎は一度息をつき、華琳の目を真つすぐ見つめる。ここで目をそらせばそれは意味をなくしてしまうだろう。

「それでも道を変えることはしない。何故ならそれは自分自身との誓いであり約束だ。生涯『正義の味方』を貫き通して示さなければならぬ。この道が間違いでないことを」

士郎にとって利用されることは特に問題ではない。しかし、彼には『正義の味方』を生涯貫き通すという目標がある。あの赤い背中と違う形で……

「そう、それがあなたの『信念』……いいでしょう。その条件飲みましょう」

「良いのか？執政者にとって私のようなものは足かせにしかならないと思うが？強力な駒でも好き勝手にされては役に立たない事の方が多いぞ？」

華琳がすんなり受け入れたことが士郎には意外だった。政務を行う者にとつて全てを救うということは不可能なことだからだ。政務を行う以上ある程度の犠牲は覚悟しなければならない。

「あら、足かせなんてあつても構わない。全てを救う……大いに結構だわ。むしろそれ位してもらわなければ困る」

今度は華琳が士郎の目を見据える。彼女の目の奥には確かに光るものがあつた。

「私はいずれこの大陸をひとつにする。覇業を成して王となる。そんな人間に仕える者が『その程度』のことができないなんて、むしろこちらから願ひ下げよ」

「なるほど……では存分に力を発揮しろと？」

「当然ね。この曹孟徳に仕える以上、その信念を貫けない場面があつたなどと絶対に言わせないわ。もし、あなたがその信念を違ふことがあつたら覚悟しておきなさい。私自ら首を刎ねてやるわ」

「はっはっは……良いだろう！私が信念に背いたと判断したら、首を刎ねるなり、心臓を突き刺すなり好きにしろ！」

「契約成立ね」

「ああ、こんな好条件は他にないだろうな」

「当たり前でしょう？あなた、誰の前にいると思ってるの」

「違うない」

士郎は素直に目の前の人間を称賛した。確かに彼女には王になる器があるのだと感じたのだ。かつて会ったことのある、王の称号を持つ者たちと同じように。

「ふふ……そうだね。そういえば、士郎の真名を聞いていなかったわね。教えてくれるかしら？」

「ふむ、教えたいのは山々だが私の世界には真名という風習はない。強いて言えば士郎というのが私の真名だ」

「……っ！」

「な、なんと……」

「むう……」

士郎の発言で穏やかだった空気が一変する。

「どうしたんだ？」

「いや。少々、予想外だったものでな……」

「ならば貴様は初対面の我々に、いきなり真名を呼ばせることを許していたと……そういう事か？」

「そちらの流儀に従うならば、そうなるだろうな。まあこちらとしても自分を示す名は士郎という名しかないのな。仕方があるまい」

衛宮士郎にとって、士郎というのが唯一の名であるのは間違いない。煉獄に焼かれた名はとうの昔に思い出せないし、衛宮という名にはもっとふさわしい者がいる。

「むむむ……」

「そうなのか……」

「そう……。なら、こちらあなたに真名を預けないと不公平でしょうね」

「なに？」

「士郎。私のことは華琳と呼んで良いわ」

「いいのか？」

「私が良いと言ってるのだから、構わないわ。……あなた達も良いわね？」

「承知しました」

「華琳様がおっしゃるのなら……いやでも、うむむ」

あつさり真名を預けた華琳と秋蘭に対し、華琳の命を受けたにも関わらず、春蘭はひとり葛藤している。

「そこまで悩むことなのか？」

「あなたが真名の意味をどう捉えているのかは知らないけれど、私たちにとって、真名というのはそれだけ重いという事よ」

「そういうもののか……気休めかもしれないが、私のことを士郎と親しみを込めて呼ぶ人間は10人にも満たない。そういう名前を預けるということで納得してもらえないか？」

「結構。なら、あらためて、私のことは華琳と呼びなさい。良いわね、春蘭も」

「はぁ……まあそういうことならば」

「それではこれからよろしく頼む、華琳」

こうして士郎は異世界で新たな生活の場を得たのだった。

「ああ、ところで華琳。太平要術書の事だが」

「それならあなたに一任するわ」

「ふむ。そういうことならこれは封印しようと思う」

「封印？それはかなり有用なものではないのか？」

春蘭が疑問の声を上げる。

「有用だが善にも悪にも使えるのでな。正直ここまでの物を悪用された場合、どこまでの規模になるか私にも読めない」

「それほどの物なのか？」

「ああ……だから、今回のように盗まれる前に先に手を打っておこうと思う。この手の封印には自信があつてな」

「へえ、そういったこともできるのね」

「……まあ過去に必要に迫られてな。得意分野ではないが並の使い手には到底解けないくらいには施せる」

「……いきさつは聞かない方が良いかしら？」

「すまんが、そうしてくれ」

士郎の封印術は大師父直伝である。それはかつて、時計塔を阿鼻叫喚の渦に叩き込んだ『紅玉と青玉の災厄』と呼ばれる事件に遡る。

大師父が現れなければ時計塔は壊滅していたかもしれないそれは、図らずも士郎と凜が大師父に弟子入りするきっかけとなった。その時士郎がまず教わったのが封印術だった。

「では、士郎がそこまでする必要があると判断したならそうしてちょうだい」

「うむ。任せよう」

こうして太平要術書は封印された。

くその晩く

「やれやれ。ここまでされてはもう打つ手がないですねえ……」

太平要術書が封印された箱の前に、道士風の男がため息をつく。そこは宝物庫の一角。本来ならば誰も入ることのできない場所に男は立っていた。

「少々手抜きでしたね。うまく盗み出してくれたと思ったのですが……世に出る前に取り戻されるとは。それにこの封印」

男の手から光が放たれる。それは箱に触れた途端、四散した。

「並ではないですね。これを解くには優に百年を費やしてしまう。はあ、仕方ありません……」

男は箱を諦めると、懷から書を取り出す。太平要術書にとてもよく似た書を……

「表舞台に立つ気はなかったのですが、まあ良いでしょう。これを使う時が来ただけです。この『太平清領書』たいへいせいりょうしょをね」

そう言つて男はその場から忽然と姿を消した。含んだ笑い声をその場に残して……

こうして運命の齒車は動き出す……動乱はすぐそこに迫っていた

## 第五話 始まりを告げるもの（後書き）

前回2、3日と言っていたのにこんなに時間が経ってしまい申し訳ないです。

この先は幕間をはさんで本編に入ります。本編はテンポよく進めていこうと思います。

## 幕間 胃袋を制す者（前書き）

幕間です。基本シリアスはないです。だいたい、章の間にこんな感じの軽いノリのものが今後はさまれていきます。ツッコミどころは満載です。

## 幕間 胃袋を制す者

「……う、ん？朝か？」

窓から薄らと光が差し込む。外はまだまだ暗いが白んできた地平と小鳥のさえずりが朝の訪れを告げていた。

（習慣というのは恐ろしいな。自然と体が起きてしまう）

大師父に弟子入りした後でも朝食の当番は士郎だった。凜は言うに及ばずだが、大師父も体質的に朝が弱かったため、朝食作りは必然的に士郎の担当になっていた。

（起きてしまったのだし、少し厨房を借りるか）

士郎は自室を出て厨房を目指す。

陳留に来てからここ数日、士郎は厨房に立つてはいない。というのも華琳達の仕事の手伝いやら街の視察等で時間が取れなかったためだ。

（久しぶりだし、少し本格的にやるか……）

士郎は腕をまくり、料理の下ごしらえを始めた。一通りの器具は整っているため、具材の準備が主になる。士郎は黙々と作り始めた。

実はここの厨房、設備は立派だがあまり使われていない。食堂が隣接しているため、人は来るのだが料理をするのはせいぜい華琳程度あとはちよつとつまみ用に肉を切る程度に使われているくらいであ

る。

「ここを腐らせておくのはもったいないな。料理人でも雇えばいいのだが」

「はあ、そんなお金どこから出すのよ。まあ、気持はわからなくもないけど」

士郎が振り向くと華琳がため息をついていた。

「おはよう、華琳。今朝も早いな。いつからそこに？」

「おはよう。つい今しがたよ。良い匂いがするから覗きに來たのよ」

そう言つて華琳は改めて厨房の中を見回す。そこには定番中華と呼ばれる品の準備が一通りそろっていた。

「……これ、士郎がひとりで？」

「ああ、そうだが？」

「すごいわね。量もだけど、どれもきちんと処理してあるのがわかるわ。どこで覚えたの？」

「私の周りには家事ができる者はほとんどいなくてな。一人暮らしも長かったし、必然的にな」

「……必然でここまでされたら料理人が店を畳むわよ」

華琳が呆れながらつぶやく。

「ちなみにこういった料理なら一緒に来たやつの方が腕が上だぞ？」

「……あなたたち、料理でこの大陸の天下を取りに来たんじゃないでしょうね」

「まさか。だが、華琳にそこまで褒めてもらえるのは光栄だよ。この前の料理はうまかった」

「ふふ、ありがと。素直に受け取っておくわ。ところで軽めの物を何かもらいたいのだけど……いいかしら？」

「喜んで」

そう言つて士郎は料理に取り掛かり、華琳は隣の食堂で出来上がるのを待つ。

「『炒飯』と『米粉』ではどちらが良い？」

「そうね。では『炒飯』をもらおうかしら」

「了解した。あとは『八宝菜』と、『麻婆豆腐』もつけようか？」

「ええ、それで十分よ」

士郎はすぐにそれらを調理する。

「お待たせしました」

「早いわね」

「ほとんど仕込みは終わっていたしな。釜二つに、鍋三つ使える厨房なんて初めてだよ」

「そこは前任者に感謝してるところよ。では、いただくわね」

そう言っで華琳はまず、炒飯を一口、続いて八宝菜を口に運ぶ。

「うん、おいしい。炒飯は炒め加減が絶妙だし、八宝菜は食材それぞれのうまみが活きている」

そして、最後に麻婆豆腐に手を出す。

「これは……」

「ん？もつと辛い方が好みだったか？食材の味を殺さないように気をつけたのだが……勝手だったか？」

固まった華琳に士郎が詫びを入れる。

「いえ、これが一番おいしいわ。ちょっと驚いただけよ。良く私の好みがわかったわね」

「ああ、この前に振舞ってもらった料理では食材の味が引き立っていたのでな。そういうのが好みだろうと推測した」

「それで。あなたを拾えたことは改めて幸運だったと再認識させられたわ」

「そこまで言ってもらえれば腕を振るったかいがあったというもの

だ」

華琳は出された料理をペロツと平らげる。

「ごちそうさま。久しぶりに料理人以外の料理で満足したわ」

「なら、毎日作るのか？」

「魅力的な提案だけれど、多分食糧が一週間もたないでしょうから却下するわ」

「一週間もたない？」

「そう。私はもう行くけど、がんばってね。士郎」

そう言って華琳は食堂を後にする。すると、入れ替わりに大勢の兵たちが食堂に入ってきた。どうやら匂いにつられたらしい。

（……そういうことか。良いだろう、今日はどこまでもやってやるじゃないか！）

士郎の主夫魂に火が灯った瞬間だった。

（春蘭、秋蘭side）

「うーん、どうすればいいのか」

「どうしたのだ姉者。姉者が悩むなどらしくないぞ？」

「うむ、そうなのだが。こつも早朝訓練に兵の出が悪いとなあ」

「ああ、それは仕方ないだろう。そもそも強制ではないのだし」

ちなみにこの早朝訓練、春蘭が華琳に良い格好を見せたくて提案したものである。その分内容がきついため、兵は真面目な奴かその気のある奴しか出ず、あまり訓練としては成り立っていないかったりする。

「本当は奇襲訓練とかやりたいのだが、兵に士気が全くないのだ」

「まあ、気持ちは分からなくもないが」

「このままでは華琳様に合わす顔がない……」

（姉者がここまで落ち込むとは……今日は人数がひと桁の大台に乗ったか？）

がつくりしている春蘭をみて、秋蘭もさすがに気の毒になってきていた。

「まあまあ姉者。そんな姉者に今日は私が何か好物でも作ろう」

「おおっ！それは本当か？では早速食堂へ……」

「？どうしたのだ？姉者？」

「いや、今日はやけに食堂の方から来る兵が多いと思ってな」

「言われてみれば……それになんだか良いにおいがするな」

兵たちがほくほく顔なのもあり、二人の歩調は人知れず早くなっていた。

「「なん…だと…？」」

二人は食堂の様子に絶句した。倉庫二つをぶち抜いて作ったと言われるこの食堂。その食堂が埋まっている。いや、それどころか立ち食いまで出ている。

「し、秋蘭。私は夢でも見ているのか？」

「姉者がそう言うのなら、これは夢ではないのだな？」

「し、しかし、この光景は……」

「おっ！二人も来たのか」

立ち尽くしていた二人に料理を持ってきた士郎が声をかける。料理は二人のすぐ横に座っている兵達の前に並べられた。

「二人は何を食べる？」

「いやまで、士郎。状況がつかめん。何が起こっている？」

「そうだ。しかもお前はなんで給仕なんてしている。そんな暇があるなら私の訓練に……」

「衛宮様——！『小籠包』を追加でお願いします——！」

「おう！今蒸しているからもう少し待ってくれ！」

入り口側と反対の席から注文が入る。士郎がそれに答えるのを見て、二人がまた絶句する。

「悪い、注文があつたら厨房に声をかけてくれ」

「ちょ、ちょっと待て。待ってくれ士郎」

秋蘭が士郎をあわてて引きとめる。

「一体何をしているんだ？」

「いや、皆に料理を振舞っているだけだが……すまん、有志が手伝ってくれているとはいえあまり厨房を空けられん」

そう言つて士郎は厨房に消えていった。二人は目が点になっている。

（（……士郎が料理？））

改めて二人は食堂を見回す。相変わらずの人だが、二人が入ってきた時がピークだったのだらう。今ではちらほら空席が見えてきている。というより、

（（……人の流れが速い））

そうなのである。注文してから料理が出てくるのが早い。それだけでなく兵たちが料理を食べるのも速い。二人の横の兵はすでに来た料理の八割を食べ終わっている。時間にして約数分。

グウ

秋蘭が呆けていると横から腹の虫が鳴くのが聴こえた。秋蘭が春蘭の方を見ると耳を真っ赤にした春蘭がそっぽを向いている。

「……姉者、我々もいたどうか」

「う、うむ」

そう言つて厨房に近い席に座る。よく見ると給仕係らしい兵がそくさと食器を片づけている。その横から料理を持って、食堂と行き来している者もいる。かなり手際が良い。

「ふう……一段落ついたか。二人は何にする？」

士郎が食堂の様子を見に来たついでに二人に注文を取る。

「ほい、菜譜」

「待て、何故そんなものがある？」

春蘭からまさかのツツコミが入る。

「有志が作ってくれたんだ。なんでもみんな好き勝手に頼むから、少し料理を制限したかったらしい」

「……ということは最初はこれ以上に料理があつたのか？」

「やろうと思えばできるが……ああ、でも食材がもう少ないからこの中からにしてももらえると助かる」

「いや、そういう意味ではなかったのだが……」

ちなみに菜谱に載っていないものは、高級食材を使った料理だったり、珍味とか言われる料理だけだったりする。

（この中以外から探す方が難しいぞ？一体何を注文されたのだろうか……）

秋蘭がため息をついているのを尻目に、春蘭は菜谱で黙々と料理を選んでいる。

「私は『チンジャオロースー青椒牛肉』、『酢豚』、『炒飯』、『小籠包』を頼む」

「心得た。小籠包は出来たてだからすぐに持ってこよう。それ以外は少し待ってくれ。秋蘭はどうする？」

「私も同じので……いや、私は『青椒牛肉』ではなく『回鍋肉』で」

「了解した」

二人の注文を取った士郎が厨房に下がる。

「それにしても士郎が料理とは」

「うむ。しかし、これだけ盛況だと味も確かなのだろう」

「お待たせ。『小籠包』にちょうど出来上がった『酢豚』だ。他のももつでできるぞ」

「早!」

士郎が二人分の小籠包と酢豚を二人の前に並べる。

「いくらなんでも早過ぎないか?」

「有志も手伝ってくれてるしな。それにあの厨房だと何品もこなせるからこれくらいで出せるんだよ」

「お待たせしました」

士郎が説明している間に残りの料理を有志の兵が持ってきた。

「では衛宮様、我々はこれで……」

「おう。もう二人の分だけか。ありがとう。助かったよ」

「いえ、我々こそ勉強になりました!また厨房に立つときには呼んでください!」

「うん、その時はまた頼む」

「はい!」

そう言って有志の面々は食堂を後にする。この時の有志達が後々城

の料理番として兵士達から喝采を浴びることになるのだが……それはまた別のお話。

「う、うまい!？」

士郎が兵を見送っていると、二人の声が食堂に響き渡った。

「士郎。料理をどこで覚えたのだ？並ではないぞ？」

「いや……家事をしていたら必然と。妥協するのは嫌いだったが」

「ふっ……全国の料理人が卒倒するな」

「それは華琳にも言われたよ」

「ごちそうさま。士郎、頼みがある」

「ん？」

二人の会話に春蘭が割って入る。ちなみに春蘭の皿はすでに空になっていることを付け加えておこう。

「……姉者、早すぎないか？いくらなんでも」

「いや、むしろ秋蘭は何を悠長にしているのだ？この味を知って箸が進まないことの方が驚きだぞ？」

「……それで頼みとはなんだ？」

「そうだった。あのな」

秋蘭が困り顔になったのを見て士郎が助け船を出す。

「私が早朝訓練をしているのを知っているな？」

「ああ、あのしごきか」

「しごき言っな！……でだ、実はくかくしかじかな訳で悩んでいるのだ」

「なるほど。それで私にどうしろというのだ？」

「うむ。訓練後に朝食を振舞うと確約してほしい」

「……は？」

士郎が春蘭の言葉に固まった。士郎としても予想外だったようだ。

「いや、構わないが……そんなことでいいのか？」

「うむ！そうすれば皆、早朝訓練に出てくるようになるだろうし、私としても思ってた通りの訓練が行えるのだ。まさに……えっと？」

「……一石二鳥か？姉者」

「そう！その蝶だ！」

「あゝ分かった。では華琳にその旨を伝えてくれ。華琳の言った条件で行うから」

「本当か！では早速！」

「春蘭」

「なんだ？」

慌てて出て行こうとする春蘭を士郎が呼び止める。

「華琳に食糧庫がひとつ空になったと伝えてくれ」

「？分かった」

そう言つて春蘭は食堂から出て行った。

「……空になったのか？」

「なったな」

「ちなみに士郎。お前はまさか毎朝厨房に立つ気ではないだろうな」

「華琳に、『一週間もたない』と言われたよ」

「なら大丈夫か。ごちそうさま」

秋蘭が食べ終わり、士郎が片づけに入る。

「さて、午前中は料理をしたし、午後はしっかり仕事に励むとするかな」

「あゝ士郎。今日はいつから厨房に？」

「華琳に朝食を作ったから……」

「いや、もういい。分かった」

「？」

秋蘭は頭を押さえている。ちなみに華琳はこの城で一番の早起きで知られている。

「まあ料理は趣味みたいなものだ」

「全く……」

秋蘭は呆れていたが、顔は笑っていた。

「ふふ、そうだ、士郎。ちょっと意見を聞きたい案件があるから手伝ってくれ」

「良いぞ。片付けたら部屋に行く」

「うむ。待っている」

そう言って秋蘭は食堂を後にし、士郎は厨房で後片付けを済ますと厨房を後にした。

この後、春蘭の早朝訓練は週一で行われることとなり、その日のみ士郎が朝食を作ることが決まった。ちなみにその日は昼食も士郎が作るのだが、訓練参加者のみ朝、昼と士郎の料理が食べられるため訓

練参加者は回を重ねるごとに増えていった。  
最終的にくじで参加を決める事態にまでなるが、それはまだ先のお話。

この日以降、土郎の料理の腕は周知の事実となり、志願兵の数が爆発的に増えることとなった。無論、食費も……

## 幕間 胃袋を制す者（後書き）

以上が幕間でございます。ちなみに季衣が来てからは土郎が厨房から出ることはなくなります。

華琳さんの台詞が一ヶ所滅茶苦茶長くなったのはここだけの秘密です。

次回から黄巾の乱編に入ります。そのうち幕間は2回くらい入る予定です。では

## 第六話 王佐の才に貸しひとつ（前書き）

今回はだいが難産でした。いつも以上に破たんしてる箇所があるかも知れないので、見つけたらツツコミお願いします。

## 第六話 王佐の才に貸しひとつ

今日の士郎の仕事は試験の受付であった。

「次の方どうぞ」

その声に導かれるように、屈強そうな男が扉を開け入ってきた。

「武官志望の方ですね。ではこの札を持って左手の入り口からお入りください」

そう言つて男は士郎の左手の入り口に消えていった。今の男でちょうど札が終わつたため、正面入り口の『武官試験受付中』の札を、『只今、武官試験中』にひっくり返す。

「随分様になっているな、士郎」

先ほどの対応を見ていた秋蘭が笑いながら話しかけてきた。

「前に似たような経験がある。最もその時は舞踏会の受付だったが」

「それは……また肩が凝りそうなことだな」

「それだけであればまだましだ。その後、『舞踏会』が『武道会』にならなければな。止めるのも楽ではなかったよ」

それは『あかいあくま』と対をなす『きんのあくま』の“些細な”逸話にすぎないのだがそれはまた別の話である。

「……土郎も思った以上に苦勞しているのだな」

「なに、あの程度が苦勞に入るのだったら、今頃私の心は擦り切れ  
て摩耗していただろうよ」

「はあ……あまり想像したくないな。とはいえ交代の時間だ。すま  
んが文官試験の方を手伝ってくれ。受付は代わりの兵が来ることに  
なっている」

「……大丈夫なのか？」

「大丈夫だろう。土郎のおかげでもうここでの不祥事は起こらない  
だろうしな」

何故土郎が試験の受付などをしているのかというと、それには訳が  
あった。実は先日、腕に覚えのある者がこの受付で暴れたのだ。受  
付の兵もそこまで腕の立つ者でなかったのが災いし、少々大事にな  
りかけた。

『なりかけた』というのはそれを土郎が一瞬で収めたのである。弓  
と矢じりを潰した矢を投影し、混乱している人々の間を通して男の  
こめかみに当て、男を気絶させたのだ。その噂はすぐに広まり、今  
後そういう輩への様子見のため土郎が受付をすることになったので  
ある。

「とっさとはいえ自分でも無茶をしたと思う」

「なに、土郎が街の警備隊長であったことも幸いだった。受付に立  
つてもらってから武官候補は良い感じに緊張し、文官候補は安心し  
て緊張がほぐれている」

『あなたの能力を見たい』という華琳の言葉に、士郎が真つ先に仕上げたのが街の警備草案。それがお気に召したようで『有言実行』の名の下、もれなく警備隊長の職に就くことになった。

「そんな人間が文官試験に加わって良いのか？逆に緊張させてしまいそうだが」

「気にする必要はない。文武両道の将官がいるというのはすでに知れ渡っている。治水工事の件は文官候補の間でも話題になっているよ」

その時判明した士郎の知識が買われ、その他、治水、開墾、築城などの草案も立てる羽目になった。結果はどれも好評であった。

「それならばいいが……やれやれ、こうなってみると大師父の教えは想像以上に役に立ったようだ」

「ほう？ではあの数々の草案はその大師父直伝か？」

「いや、大師父曰く、『知っているだけではいかん。知識を使いこなせてこそその知じゃ』というのがあってな。聞きかじり程度の知識全てを再度叩き込まれたんだ。その時言語関係も全般な」

「なるほど。ではこの国の言葉の読み書きができたのも……」

「その『地獄の特訓』のおかげだ……が、もう二度とごめんだ。命がいくつあっても足りん。自分でもよく生きていられたと感心するくらいなんだ」

「……本当に苦労しているな」

士郎が苦労話をしているうちに代わりの兵が来たので、秋蘭と連れだって試験用の部屋へ向かう。

「そう言えば今日の収穫はどんな感じだ？」

「あまり目ぼしいのはいないな。磨けば光るのは何人かいたが……さすがに本職でない以上、すぐには判断できん」

「ふむ……ではこの後に期待と」

「そうなるな」

チリン、チリーン

試験の受験者が来た場合、外の兵が鈴を鳴らし合図をする手はずになっている。なお、試験がある時はたいてい朝から夕方まで鳴りっぱなしである。

「どうぞ」

「つつ!？」

秋蘭の声に導かれ、扉を開けた猫耳頭巾をかぶった少女が、部屋の中を見た途端、声なき悲鳴を上げる。その視線は士郎に向けられていた。

「どうした？」

「いえ……別に」

「？」

少女は、警戒心を浮かべたまま用意された席に着く。しかし、土郎を見る目は殺気立っていた。

「あゝ始める前に、少し良いか？」

「……なに……んですか？」

「とりあえず、殺気を向けるのをやめてもらえるか？」

「無理」

（……なんでさ）

土郎の言葉に即反応。さすがの秋蘭も目が点になっている。

「秋蘭」

「なんだ？」

土郎が小声で耳打ちをする。

「私はおとなしく書記に徹するから、後を頼む」

「うむ。本当なら土郎には質問をしてほしかったが、仕方がない」

秋蘭の同意を得られたので、彼女の前にあった竹簡と硯を自分の前

に置く。

「それでは始める。まず、名前は？」

「荀（ジュン）イクです」

「なに！？」

少女の名前に反応し、士郎が思わず叫ぶ。その声に荀イクが「ひつ」と小さな悲鳴を上げて仰け反った。

「ど、どうしたのだ？士郎？」

「あ、ああ……すまない。まさか『王佐の才』を持つ者がこんな少女だとは思わなくて」

「ちょっと、なんであなたがそれを知ってるのよ！？」

士郎の発言に今度は荀？が驚きの声を上げた。しかし、秋蘭はどういうことか理解できずにいた。

「士郎、『王佐の才』とは？」

「ああ、『王佐の才』とは王を佐けるの意味で、例えば齊の桓公に仕えた管仲のように、仕えた人物を偉大にする才能のことだ」

「質問に答えなさいよ！！」

士郎が自分を無視したことが相当気に食わないらしく、荀イクが士郎に食ってかかった。

「ああ、すまない。あゝさっきの質問についてだが……」

「荀イク、我が陣営の『天の遣い』について知っているか？」

答えづらそうにしている士郎に秋蘭が助け船を出した。

「知っているわ。なんでも天の国の知識とやらで曹操様の手助けをしているとか。まあ所詮、単なる噂で……」

そう話していた荀イクが固まった。そして、錆びたロボットが無理やり首を回すように、士郎の方を見る。

「……まさか？」

「そう。こ奴が天の遣いだ」

「こんな冴えない男があ！？だって威厳も後光も何もないじゃない！？」

（ええ……）

さすがの士郎も初対面の相手にここまで言われたことはない。というかドン引きである。

「……私はそこまで君に言われる必要があるのか？」

「ええ、大ありよ！私<sup>カ</sup>が何ギョウについて先日言われたことを、曹操様ならまだしもあんたみたいなのに知られているなんて！」

「まあそこが天の遣いとしての知識であつて……」

「ちよつと、待て。今何ギヨウと言つたか？」

秋蘭が二人の会話に割つて入つた。何？という人物に心当たりがあるようだが、士郎の知識にはない。

「何ギヨウなら知っている。都に行つた際、華琳様に『天下を安んじるのはあなたに違いない』と言つてのけた人物だ」

「ええ。その『何ギヨウ』に言われたの。その時に曹操様のことも聞いたわ」

「ふむ……ならば信用できるか」

「すまん、秋蘭。その『何ギヨウ』とは？」

「……なんで私のこと知つてて『何ギヨウ』のことを知らないのよ」

「悪かつたな」

「姓は何、名はギヨウ、字は伯求。ハクキョウ人相見に長けた人物で、多くの名士が彼と親しくし、その品行方正さから彼を慕う者は多いと聞く」

「なるほど。そういう人か」

「何ギヨウと士郎が言っているのなら間違いないだろう」

「なら！」

「ちょっと待ってくれ」

喜んでいた荀イクが士郎を睨みつける。今の彼女なら視線だけで人を殺せるかもしれない。

「……」

「そう睨みつけるな。一応君があジュンブンジャクの荀文若であることを確かめたいだけだ」

「ふむ……士郎、どうするのだ？」

「簡単だよ。荀イク、君は名士をよく知っていると聞いている。だから、その名士の名を挙げてほしい」

「それ、適当に有名どころを挙げれば誰でも合格できるんじゃない？まあ何ギョウも知らない奴が名士の名前を知っていると思えないけど」

「ああ、それなら問題ない。おそらく君が挙げる名前は分かるだろう」

「……言ってくれるわね。まあ良いわ。ここで名を挙げた人物はどうせ曹操様のお耳に入るでしょうし……そうね、この近辺なら鍾ショウウヨウと陳チングンかしら。二人とも潁川にいるから私の名前を出せばやってきてくれると思うわよ？どう満足した？」

「ふつ、ああ申し分ないな」

士郎の発言にしたり顔だった荀イクの顔が驚愕の色に変わる。

「嘘！？二人とも私の生国出身だから吠え面かせてやれると思ったのに！」

「あゝ一応これは君の採用試験なんだが？」

「それとこれとは別よ！調べれば名士かどうかなんてすぐにわかるんだから、あんたに吠え面かかせるのは当然でしょ！」

「それで士郎。その二人は本当に優れた人材なのか？私は全く聞いたことがないのだが」

「問題ない。むしろ二人の名前が挙がったことで、私の中で彼女が荀イクであることに納得できたよ」

「あんたなんかには納得されても嬉しくないわよ」

士郎のさじ加減一つで荀イクに明日はないのだが、彼女の毒が止まる気配はない。

「まあ、とにかく荀イクには明日から来てもらうことにして……」

「し、將軍！失礼します！」

秋蘭がまともに入ろうとしたその時、慌てて兵が部屋に入ってきた。

「何事だ」

「はっ！曹操様に山向こうの盗賊団討伐の任が下り、その軍議を開くとのこと。衛宮様も出席してほしいと」

「了解した。荀イク、聞いての通りだ。すまんが、この討伐が終わってから連絡を……」

「いや、秋蘭。彼女も連れて行こう」

「「はあ!？」」

秋蘭だけでなく、荀イクも驚きの声を上げる。

「どういうことだ？」

「なに……使える人材なのだから早速役に立ってもらおうと思ったのだから」

「この遠征で力のほどを見ると？」

「そうだ。まあこれくらいなら腕試しにもなるまい」

「ふむ……」

士郎がそう言うのと秋蘭は考え込んでしまった。対して荀イクは本日何度目になるか、士郎を睨みつけている。

「何のつもり？別にあなたの助けなんて、これっばちも必要じゃないんだけど？」

「なんだ？早く側仕えになりたいんじゃないのか？」

「そうだけどあんたなんか助けられたくな……」

「秋蘭、やはり私たちふた「行かないなんて言っていないでしょ！」……だそうだ」

「ふふ……良いだろう。判断は華琳様に任せるとしようか」

「決まりだな」

「ぐう……」

荀イクはまだ納得いかない顔をしているが、士郎と秋蘭が部屋を出ていくのについて行った。

「……あんだ後で覚えてなさいよ」

今の荀イクにはこう言うのが精一杯であった。

## 第六話 王佐の才に貸しひとつ（後書き）

とりあえずオリキャラで使う予定のキャラ二人の名前を出せて良かったです。

何ギョウさんは名前だけです。三国志関連で名前拳がってるの見たことないし、荀イクさん絡みなら出しても良いかなと思って出してみました。

ここから始まる黄巾討伐までが原作に沿った流れになります。虎牢関の戦いからは多分違ってくる……はずです。ではでは

## 第七話 荀イクが一瞬でやってくれました（前書き）

ご無沙汰です。地震とかありましたが自分の住んでるところに被害はありませんでした。

このままだとズルズル書かなくなりそうだったのでこんな時期です  
が投稿します。

## 第七話 荀イクが一瞬でやってくれました

「来たわね、秋蘭、士郎……と、誰かしら？」

「お初にお目にかかります」

二人が入ってきた後ろから荀イクが姿を現す。

「姓は荀<sup>ジュン</sup>、名はイク、字は文若<sup>ブンジャク</sup>と申します。曹操様の軍師となるべく参上いたしました」

「秋蘭、士郎、どういうことかしら？」

華琳は優しく士郎たちに微笑みかける。が、華琳の目が笑っていない。どこぞでみた『あくま』の目と同じ目をしている。

「か、華琳様……そ、それは」

「華琳、荀イクは『王佐の才』を持ってるんだ」

「なんですって！？この子が？」

「ちょっと！なんであんたが曹操様の真名を呼んでいるのよー！」

「荀イクよ……今はそこにツッコんでいる場合ではないと思うが」

「士郎、詳しく説明しなさい」

荀イクと秋蘭のやりとりを無視して華琳が士郎に問いかける。

「言葉通りの意味だ。ちなみに何ギヨウのお墨付きだ」

「何ギヨウの？では本当みたいね」

「華琳様？」

「実は何ギヨウから手紙が届いたのよ。『近々そっちに有能な人間が顔を出すかもしれない』と。まあそれが『王佐の才』とは書いてなかったけれど」

「荀イクのこと……知っていたのか」

「当然よ。有能な人材の情報は常に集めておくものよ」

「曹操様……」

華琳の発言に荀イクが蕩けた声を上げる。

「でも、こんなかわいらしい子だとは思ってもみなかったわ」

「ああ……」

百合百合しい。そんな言葉で表現すべき空気が場を包み込み始めた。

「……はあ、これでは軍議が始められないんだが。春蘭も何とか言ってく……」

「いいなあ……」

（……まずい！）

士郎は春蘭が場の空気に半分染まっているのを見て、思わず秋蘭の方を振り向く。

「むう……」

（なんとか無事か。片足突っ込んでるが……）

「秋蘭！」

「……な、何だ士郎？」

「とりあえず軍議を」

「あ、ああ、そうであったな。華琳様、ほら二人も」

（……こればかりは慣れないな）

華琳以外の二人をなだめている秋蘭を見て、士郎は思わずため息をついた。ほどなくして全員席に着く。

「あら？士郎も混ぜてほしかったの？」

「……他人の情事に口出しする気はないが、巻き込もうとするのはやめてもらいたいな。あと、時と場所も考えてくれ」

「全てわきまえてるつもりだけど？」

「私は軍議に呼ばれてこの場に來たはずだが？そういったものを見

せられに来たわけではない」

隙を見つけた華琳がすかさず切り込む。

「見たいの？」

「変態！！」

便乗するのは荀イク。

「……はあ、もういい」

「華琳様……そろそろ軍議を始めないと」

「あら、もうそんな時間？では状況の説明を。使者をこれに」

秋蘭が軍議を促すと、華琳が外から使者を呼ぶ。その使者から今回の事件のあらましが語られた。

「ふざけているのか！それは！」

「ひっ」

春蘭が吠えて拳を卓に叩きつける。その剣幕に使者は悲鳴を上げる。

「姉者、どうどう」

「春蘭の怒りも尤もだが……それ位にしないと卓が割れる」

「まさか、賊に怯えて自領を放棄して逃げ出す刺史がいるとはね」

「はぁ……それで私に白羽の矢が立ったと？」

華琳が半ば呆れて使者に問いかける。

「は、はい。都でも曹操殿以外に適任はいないと」

「承知した。すぐにでも討伐軍を出しましょう」

「ありがとうございます。良き知らせをお待ちしております」

そう言う使者はそそくさと退出していった。その実、春蘭にびびったのだろう。

「それで、どうするんだ？一応遠征になるのだろうか？」

「そうね。荀イク、あなたの手並みを見たいのだけど？」

「はい。このような編成でどうでしょう？」

そう言う荀イクは手元の竹簡を華琳に渡す。

「へえ……随分と手際が良いわね」

「曹操様のためなら」

その竹簡には今回の遠征の編成が書かれていた。

「使者の話を聞いてすぐ近場の文官と話していたのはそういう訳か」

「ええ。装備と兵数と糧食について知りたかったから資料を持ってきたもらったのよ」

「普通、もつと時間がかかるものなんだがな」

「資料があれば簡単よ。それにきちんとまとめられていたし」

「荀イク……ひとつだけ気になるところがあるのだけれど？」

竹簡を見ていた華琳の目がある一ヶ所で止まる。口調からして穏やかではない。

「糧食が通常量の半分というのはどういう訳かしら？」

「「「なっ!？」」「」」

三人が驚愕の声を上げ荀イクの方を見る。しかし、荀イクの表情はまるでどこ吹く風、涼しい顔をしている。

「何か問題が？」

「ほう？これを問題ないと言つのなら、それ相応の理由があるのかしら？」

華琳の静かだが威圧的な言葉に誰も声が出せない。ただ荀イクひとりだけがそれに対している。

「はい、大きな理由は二つ。ひとつは『兵の錬度』、もうひとつは

『軍の質』です」

荀？はたんと語り始めた。

「前者は言わずもがな。今までの戦歴を見れば一目瞭然。さらに早朝訓練の様子を見れば兵の精強さは大陸で五本の指に入るでしょう。そのため兵の動員数は通常通りで良いと判断しました。そのため糧食の量も減らしています」

（あの早朝訓練か）

士郎の朝食目当ての早朝訓練だが成果は確かに上がっている。食欲恐るべし。

「後者ですが、相手がただの野盗の類であるということです。この程度の相手に戦闘時間は多くかかりません。以上が糧食が半分な理由です。」

「……本当にそれだけかしら？」

華琳の口調は変わらない。荀イクに対してさらに問いを投げかける。

「……あえて付け加えるならば」

荀イクは一呼吸置いて華琳を見つめる。

「この荀イクが軍師で、我が策を用いる以上、今までのような時間の浪費は二度と無いということです」

荀イクの言葉の後、場は静まりかえった。

「……ふっ、あははははっ！」

そして、華琳の笑い声が場の静寂を引き裂いた。

「ああ、おかしい。それでは手綱を存分に握ってもらおうかしら」

「はいっ！」

「それと、荀イク、あなたの真名は何と言つのかしら？」

「ケイファ桂花にございます」

「そう。これからはあなたを真名で呼ばせてもらおうわ。そして、私の真名を呼ぶことを許します」

「は、はいっ！ーありがとうございます！華琳様ー！」

「皆も桂花とは互いに真名で呼び合うように。良いわね」

「「はっ！」」

双子の姉妹がそれに答える。

「その中には私も含まれるのか？」

「当然でしょう」

「はあ……」

華琳の答えの後、土郎が桂花の方を見ると桂花が睨みつけてきた。その視線には『真名を呼んだら殺す』と暗に言っていたのだが……

「華琳の『命』では仕方がない。これからは私も真名で呼ばせてもらう、良いな？ 桂花」

「ぐっ、うつつ」

桂花がわなわなとふるえているが、何もしないところを見ると了承したようだ。さらに、華琳が桂花の方を見たため、すぐにそれも収まった。

「では桂花、あなたの『王佐の才』、私が天下を取るため存分に使用させてもらうとする」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。ただし、不足なことがあった場合……その失態、身をもって償ってもらわよ？」

「御意！」

「では皆の者！ 準備にかかれ！ 明朝にここを立つ！」

「とじろで……」

「どうした？姉者」

士郎、春蘭、秋蘭の三人が各々の準備のため現場に向かって連れだつて歩いていると、春蘭が唐突に言葉を発した。

「桂花が言った『時間の浪費』とは何のことなのだ？」

「「！！」」

春蘭以外の足が止まる。春蘭がそれに気づき二人を見ると、秋蘭はそっぽを向き、士郎は下を向いていた。二人の肩は共に震えていた。

「二人ともどうしたのだ？」

「っ、春蘭、私が、説明、してやろう」

そう言うとき士郎は大きく息をつき、呼吸を整えた。

「今までの戦闘ではどんなか覚えているか？」

「うむ！私が先陣を切り、兵を率いて正面から切り込んでいた！それで毎回ほぼ片がついていたな」

士郎はちらつと秋蘭の方を見る。秋蘭は士郎たちに背を向け下を向いていた。明らかに腹を押さえていたが士郎はそれを無視した。

「うん、要するにだ」

「うむ」

もう一度士郎は呼吸を整える。

「桂花はあの場で華琳に、『今までのように馬鹿みたいに真正面から猪のように突っ込んでいくだけの無駄な戦闘は今後絶対にしません』と言ったのだ」

ついに秋蘭がうずくまった。春蘭はぱかんとしていたが、意味が分かったと顔に怒りを浮かべ士郎たちに背を向けた。

「春蘭」

「なんだ！」

「桂花なら次の分れ道を右だ」

「わかった！」

そう言うとき春蘭はものすごい速さで消えていった。秋蘭はやっと落ち着いたのかゆっくり立ち上がった。その目じりには涙がにじんでいた。

「……何気にひどいな秋蘭」

「なに、あれが姉者の魅力というものだ」

「それは……わからなくもないが」

「ふふ、士郎も分かってきたな」

「もっと扱いづらい奴がいっぱいいたからな」

そう言つて士郎は『あかい』のと『きんいろ』のを思い出す。

「それは難儀だが、嫌ではなさそうだな？」

「もう慣れた。それに比べれば春蘭は全然だ。まあこれで準備に支障が出なければいいが……」

「それも大丈夫だろう。ではここで」

「？うん」

秋蘭はそう言つて士郎と分かれ左の方に進む。士郎も自分の準備のために現場に向かった。

明朝、予定通り準備が整つた一行は討伐行に出る。ちなみに秋蘭曰く、昨日帰ってきた春蘭はとても機嫌が良かったそう。

## 第七話 荀イクが一瞬でやってきました（後書き）

次の次でやつと戦闘描写が書けそうです。とりあえず課題は秋蘭と桂花をもつと魅力的に書くことでしょうか。

遅筆なのはご容赦ください。

では皆さん、体調にお気を付けください。自分は酷い目に逢いました。ではでは

## 第八話 見た目と筋力に因果関係はない（前書き）

ご無沙汰です。楽しみにしていただいてる方に愛想尽かされないか心配ですが、がんばって完結させることはここで誓っておきます。

## 第八話 見た目と筋力に因果関係はない

——それはこの世界ではごくありふれた風景……

——男は畑仕事に精を出し……

——女は家事に買い物に……

——子供たちは駆け回り……

——老人たちはそんな子供たちを優しく見守る……

——ごくありふれた……平和な風景……

——しかし、それが許されないのが……『乱世』なのである

見張りの男が血相を変えて駆けてくる。

「盗賊だああああ!!!!」

（どうして……）

「みんな早く逃げろ! もうすぐこの村にやってくるぞ!」

（誰も助けてくれない……）

「お前も早く逃げるんだ!」

（誰も守ってくれない……なら！）

「おい！早く……」

「僕が行く！」

「なっ！？」

少女の言葉に男は驚愕する。いや、周りの村人たち全員が驚いた表情で少女を見ていた。

「馬鹿な考えはやめろ！」

「いやだ！だって僕が一番この村で力があつて強いから！だから僕がみんなを守る！」

そう言つて少女は一人、村の外に駆けて行つた。

「おい！待つんだ！」

「……行つてもらうしかない」

「村長！？」

その言葉に村の誰もが発言者に目を向ける。

「彼女が盗賊たちを相手にしているうちに我々は避難しよう」

「ですが！」

「今、我々に残された最善はそれしかないのだ……」

「……」

村長の悲痛な面持ちで放たれた言葉に誰も何も言えず、一人、また一人と避難を始めるのだった。

「馬に乗るのもやつと慣れてきたな」

士郎はそう呟き、乗っている馬の首筋を優しくなでる。それに答えるかのように馬が嘶く。

「随分様になっているな、士郎」

「秋蘭、よしてくれ。君たちの教え方が良かっただけだ」

「そう言ってもらえてうれしい限りだ」

そう言って微笑む秋蘭。その様子に士郎も笑みがこぼれる。

「ん？あれは桂花か」

「そのようだ。おい、桂花」

前方にいる桂花に秋蘭が気づき、話をしようと士郎が声をかけた。

「なによ……って、なんであんたがその馬に乗ってるのよ!？」

「あゝまずそこに食いつくか」

「当たり前でしょ!そこらへんの駄馬がお似合いのあんたが、なん  
で華琳様の愛馬『絶影』に乗ってるのよ!」

そう、士郎が乗っている馬の名は『絶影』。本家三国志にも記述の  
ある曹操の乗馬である。

「君を連れてきた褒美だそうだ。最も今回の遠征のみだがね」

「……なんだか私があんたの功績を増やしたみたいで自己嫌悪で吐  
きそうよ」

「まあまあ、桂花。今回の褒美も士郎が乗馬が下手なのを察しての  
処置だと思えば良い」

秋蘭が、本気で渋い顔をしている桂花をたしなめる。

「はあ……それにしても糧食の量は本当に大丈夫なのか?君の判断  
を疑うつもりではないが」

「大丈夫よ。一人で十人前くらい食べるような奴がいなければ確実  
にもつわ」

桂花のふふんとした表情とは裏腹に士郎が思い浮かべたのは、過去

に彼の家のエンゲル係数を押し上げた虎と獅子のことだった。

（さすがにあそこまでのはいないか）

「おお、貴様ら、こんな所にいたか」

「どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方になにやら大人数の集団がいるらしい。華琳様がお呼びだ。すぐに来い」

春蘭の言葉に三人はそろってうなづいた。

華琳の前に着いてすぐ秋蘭が声をかける。

「……遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰ってきたところよ。報告を」

「はっ！行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、どこかの野盗か山賊だと思われます」

その偵察の報告に華琳が考え込む。

「……様子を見るべきかしら」

「もう一度、偵察隊を出しましょう。春蘭、士郎、あなた達が指揮

を執って」

「……私ひとりの方がいいのでは？」

「なんだと！」

士郎の発言に怒りをあらわにする春蘭だが、それを向けられている当の本人は意に介さず桂花に説明を促す。

「戦闘の時、春蘭がいた方が良いと思うけど？正直、あなた一人だと不安というのが本音よ。戦は街の警備とは違うのだし。それに春蘭もここに置いておいても無駄だろうし」

「ふむ……まあ春蘭の評価については妥当だな。だが、私のことについては同意しかねる。私一人では心許ないと思われるのは心外だな」

「あなたの話で有名なのはもっぱら内政の評価のみ。加えて早朝訓練にも参加せず、街の警備隊長では春蘭の抑えでもかなりの高評価だと思うけれど？」

「ええい！私を無視するな！」

「……はあ」

士郎と桂花の二人は春蘭の方をちらつと見やり同時にため息をついた。

「姉者、今二人は姉者の武を信頼しているから口論をしているのだ」

「？おう」

その言葉に自分が褒められているのだと理解した春蘭が引き下がる。

「ふむ……どうしてもダメかな？」

「いいわ。士郎、あなたひとりで偵察隊の指揮を執りなさい」

「華琳様！？」

「ただし、失敗は許さない。偵察くらいは軽くこなしてもらわないと置いておく意味がないわ」

「了解した。何、万が一もないさ……桂花、睨まなくてももらえるか？」

桂花が士郎のことを殺すかの勢いで睨んでいる。歯ぎしりの音まで聞こえるあたり相当だろう。

華琳の言葉もあり、結局桂花が折れたため士郎ひとりで偵察に行くことになった。

「衛宮様！見えました！」

「ああ、こちらでも確認した」

兵から報告が入るとともに、士郎の目も集団の影を捕らえた。士郎

は目を『強化』しているため、その集団の様子が良く見えていた。

「ん？動きを止めたな」

「み、見えるのですか」

「ああ。しかし、あれは？一箇所にどまっているが何をさわ……い……で!？」

士郎は見た。集団の真ん中から吹きあがったものを。それは間違いなく人であった。

「なんだ、あれは!」

（良かった……自分の目がおかしくなったわけではないようだ）

「誰か戦っているようだな。戦っているのは……女の子？しかも一人!？」

士郎はそれを確認すると馬に鞭を入れる。その前に兵に指示を出すのは忘れずに。

「でえええええいいい!」

「ぐはあっ!」

「ええい、テメェら、ガキ一人に何を手こずって!数でいけ、数で!」

少女の気合を入れて放たれた鉄球に野盗達が宙を舞う。それを見ていた隊長らしき声に従い少女を囲い始めた。

「はぁ……はぁ……はぁ……。もう、こんなにたくさん……多すぎるよう……！」

「ぐふうっ！」

「……え？」

そこに士郎が囲いを破るように突撃してきた。

「大丈夫か？勇敢な少女よ」

「え……？あ………はいっ！」

「やれやれ……手加減はできそうにない………な！！」

さらに士郎は、少女を後ろから襲おうとしていた賊を『干将』と『莫耶』で切り捨てる。

「貴様ら……子供一人によってたかって………当然、覚悟はできているだろうなっ！！」

「ひう………っ！退却！退却——っ！」

士郎の殺気に野盗達が蜘蛛の子を散らすように逃げて行く。

「ふう………あの程度の殺気で逃げ出すとはな。あらためて大丈夫か

「？」

「は、はい」

士郎は馬から降り、野盗達が全て逃げ出したのを見て、少女に声をかける。少女に怪我がないのを確認すると近くの副官に声をかける。

「首尾はどうだ？」

「はっ！何人かの兵が逃走に紛れ込むのを確認しました」

「そうか……一応疑われない程度に追撃もしておいてくれ」

「わかりました」

そう言つて副官は騎馬隊を率いて追撃に向かった。これで確実に野盗達は本拠地まで逃げ込むだろう。

「あ、あの」

「ああ、すまない。ほつというて悪かったね」

「そんなつ、ありがとうございます！おかげで助かりました！」

「無事で何よりだ……ええつと、すまないが名前を教えてもらえるか？」

「はい！姓は許、<sup>キヨ</sup>名はチヨ、字は仲康<sup>チユウコウ</sup>といいます！」

「ほう……」

「??」

士郎の驚いたという表情に、許チヨが不思議そうな顔をする。

（許チヨといえば曹操の親衛隊長として常に横に仕えていたという……にしてもこんな少女がねえ）

目の前の少女は小柄で、服装はへそ出しルックに膝上もない半ズボン、鎧と呼べるかわからない肩当てと腰当という格好だった。赤毛の髪は二つに分けて束ねられており、それは小型のパイナップルのように上を向いていた。

（格好よりむしろ武器の方が問題か。モーニングスターの亜種かな？だがどう見ても鉄製の剣玉の球がドでかい鉄球に変わったただけのような……）

「え、えつと……」

「おお、すまない、気分を悪くさせたか？」

「い、いえ！あまり人からじつと見られたことがなくて……その」

士郎の言葉に許チヨは頬を赤くしてうつむいた。士郎はそをみて頭に？を浮かべたが気にせず質問をする。

「ふむ。しかし、なぜこんな所で一人で戦っていたんだ？」

「はい、それは……」

「ああ、すまない。どうやら本隊が来たみたいだ」

「……………っ！」

許チヨが話しをしようとしたとき、そこに華琳達本隊がやってきた。

「士郎、戦闘があつたという報告は聞いたけれど？」

「ああ、賊は殺気に怯えて逃げ出したよ。今尾行をしてもらっているから、すぐに本拠地が分かるだろう」

「あら。なかなか気が利くわね」

「あ、あなた……………！」

士郎と話す華琳を見て、許チヨが動揺する。

「お兄さん、もしかして、国の軍隊……………っ！？」

「まあ、そうなるが……………ぐっ！」

士郎が答えた瞬間、少女から巨大な鉄球が振り下ろされた。士郎はそれを何とか受け流したが、衝撃に顔をしかめる。

許チヨには怒りの表情が浮かんでおり、若干目の端に涙が光っていた。それは彼女の怒りが並大抵のものではないことを物語っている。

「国の軍隊なんか信用できるもんか！僕達を守ってもくれないクセに税金ばかり持っていつて！」

「てやああああっ！」

「…………ぐうつ！」

許チヨは声を上げさらに攻撃する。それに対し士郎も防戦することしかできなかった。

「だから君は一人で戦ってたのか…………？」

「そうだよ！僕が村で一番強いから、僕がみんなを守らなきゃいけないんだっ！盗人からも、おまえたち…………役人からもっ！」

「くっ！いい加減…………腕が痺れて…………っ！」

士郎は苦悶の声を上げる。

（誤解を解く暇もないなっ！しかし、ここの刺史はすでに逃げ出して、自分たちは山を越えて遠征してきたと言っても火に油を注ぎそうだし…………っ！）

士郎はちらつと華琳をみる。そこには手を白くなるまで握り、悲しげな表情をして黙っている少女がいた。ただ、その目に確かな決意の光を宿して。

「二人とも、そこまでよ！」

華琳の決意ある声が少女の動きを止める。

「え…………っ？」

「剣を引きなさい！ その娘も、士郎も！」

「は……はいっ！」

華琳の声に気押された許？が言われるがままに自分の得物を手放す。

どっつっどっおおん

（……よく生きてたな、俺）

地面に陥没した鉄球をみて士郎は自分が『強化』もせずあの武器を捌いていたことに戦慄するのだった。

## 第八話 見た目と筋力に因果関係はない（後書き）

本当は3月中に投稿して、エイプリルフルネタも考えていたのになぜこうなった。

とりあえず月刊ペースにはならないように投稿していけるよう頑張ります。

最低でもあと一回は今月中に投稿します。ではでは

## 第九話 士郎にフラグが立ちました（前書き）

何とか今月中にもう一話書けました。

何故こんな切羽詰まったことに……

それはともかく大変お待たせいたしました。どうぞ。

## 第九話 士郎にフラグが立ちました

銅鑼の音が鳴り響く。そして、

『うおおおおお』

雄たけびとともに、土煙を上げながら迫る敵軍。眼前に迫りくるそれは野生の獣の群れの様。

「……………」

さすがの華琳もこの光景には言葉を失っていた。

「に、兄ちゃん……………」

許チヨも横にいる士郎を見上げる。表情から動揺しているのは明らかで、心配そうに士郎を見る。

「……………なあ、桂花」

士郎も思わず作戦提案者の桂花を見やる。

「な、なによ。いくら私でもここまでとは思わなかったわよ!」

士郎達の抗議の視線に桂花が半ば逆切れな声を上げる。

「いや、別に責めるつもりはないんだ……………ただ」

「ただ何よ……………」

士郎と桂花が言い合いをしている間も敵は声を上げながら迫っていた。それを見て士郎は視線を済み渡る青空に向け、思った。

（なんでこうなった？）

く遡ること少し前く

許チヨは結果として華琳の軍に加わることとなった。

理由は、華琳がこの地を治めている刺史ではないと誤解が解け、さらに陳留の評判の良さがここまで届いていたこと。

しかし、一番の理由は、

「許チヨ、ごめんなさい」

この華琳の謝罪だろう。

華琳は国の刺史として、また、同じ官の酷さを知る者として、許チヨに頭を下げたのである。

この行動に士郎たち将だけでなく、兵たちも目を見張った。普段から霸王を目指し、誰よりも王たらんとした華琳が誰かに頭を下げるとは誰も思っていなかったのだ。

だが、それで華琳を見限る者は誰もいなかった。いや、それどころか皆この人になら命をかけても良いと改めて誓いなおしたのだ。皆が知っている。華琳がどれだけ努力しているのか。どれだけ自分たち『民』のことを考えているのか。

この乱世においてそれがどれだけ有り難く、尊いものか。それは命をかけるのに値する。

士郎も同じように目を見張っていた。ただ、士郎の場合は華琳が頭を下げたことではなく、それをあっさりできる器の大きさにである。

上に立つ者が頭を下げることは時と場合によっては致命的である。それは自分の非を認めることであり、今まで積み重ねてきたものをすべて否定することになりかねないからだ。

しかし、華琳の場合は違っていた。

——民のことを考え努力していた

——民のために政策を行ってきた

——それでも手が届かない場所があることを知っていた

——そして、自身の手でそれを無くすために『王』になろうとした

この謝罪はそんな『王』になる覚悟があるからこそできること。士郎はそんな華琳に素直に感心した。そして、華琳の作った国を、理

想を、見たいと思った。

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇気。この私に貸して欲しい」

「あ……あの……。曹操さまが王様になったら……僕達の村も守ってくれますか？盗賊も、やつつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでも……この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

華琳のこの言葉に許チヨだけでなく、その場にいた将兵達全てが思う……この人を王にしたいと。

「ふふ……」

「何か文句でもあるの？士郎？」

「いや、何もない……あるのは君に会えて良かったと、ただそれだけだよ」

「あら？今さら気づいたの？」

士郎の発言に面白そうに問いをかける華琳。士郎がそれに答えようとしたとき、

「華琳様、偵察の兵が戻りました！盗賊団の本拠地は、すぐそこです！」

桂花の声に場の空気が変わる。華琳も士郎もその顔から笑みが消えていた。

盗賊団の本拠地に向かうに当たり華琳は許チヨに協力を提案。まずはあなたの村を脅かす盗賊団を根絶やしにすると。それに許チヨは二つ返事で応じる。そして、

「あ、あの……お兄、さん……」

「ああ、さっきのことなら気にするな。その力を盗賊退治に存分に役立ててくれ」

「は……はいっ！」

許チヨは先ほどの攻撃を士郎に謝る。士郎もともと勘違いからくることだったのであっさりと許した。

こうして許チヨは華琳達と行動を共にすることとなった。

一行は盗賊団の本拠地である砦が見える地点で行軍を停止。それは山の影に隠れるようにひっそりと建てられており、通常ならば発見は困難であったに違いない。

だが、元々発見されにくい場所に建てられているため、砦は士郎達にその無防備な姿をさらすこととなった。

「さて、軍議……と言っても桂花の作戦を聞くだけか」

「そうね……王佐の才の實力、見せてもらおうかしら」

「では、今回の作戦の説明をさせていただきます」

桂花の作戦は華琳が少数の兵を率いて砦の正面に展開、その隙に春蘭、秋蘭が残りの兵を率いて後方の崖に待機。

本隊が銅鑼を鳴らし、攻撃の構えを見せる。それに乗じて攻めてきた賊軍を誘い退却したところで後方から二人の部隊が奇襲を仕掛ける。

「なるほど『偽退誘敵』で誘い出した後に『後方奇襲』で壊滅させるのか」

「悪くない手ね」

「……ちよつと待て。それは何か？華琳さまに叵をしると、そういうわけか！」

春蘭が作戦の意味を理解したのか今さら声を上げる。

「……何か問題があるのか？春蘭？」

「大ありだ！華琳様にそんな危険なことをさせるわけにはいかん！」

「大丈夫よ。だって士郎が付いていてくれるもの」

周りの時が止まる。春蘭は目が点になっていて、秋蘭は驚きながらも春蘭の様子を見て満足そう。

許チヨは周りの様子に戸惑っていて、桂花は士郎を殺さんばかりに

睨みつけている。

華琳はその様子を見て微笑んでいた。士郎はそんな場の空気に嫌気がさし、言葉を発した。

「あゝ華琳、そう言ってくれるのはうれしいが、それが根拠になるのか？」

「……あなた私を馬鹿にしてるの？あなたがその辺にいる将兵より強いのは立ち居振る舞いを見れば一目瞭然よ」

「それにしたってあの言い方はないんじゃないか？ほら、春蘭が固まったままだ」

「ふふ、華琳様も人が悪い。姉者、いい加減起きてくれ」

「はっ！」

春蘭が目を覚ましたが、これ以上何か言われる前に士郎が発言する。

「だが、万一敵が出てこない場合どうするんだ？」

「この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあるから、そうなったら城内から砦を攻め落とすだけよ。まあ、相手は志も持たず自分勝手に武を奮っている愚者達だから間違いなく、春蘭よりも容易く挑発に乗ってくれるでしょうね」

「……な、ななな…なんだとおー！」

「はいどうぞ。春蘭、あなたの負けよ」

「……勝ち負け以前の問題のような」

「士郎！！半分は貴様のせいなんだからな！！」

（なんでさ）

とはいえこれで砦を攻め落とす算段はついた。春蘭もさらに許チヨが華琳の護衛に付くことで納得した。

春蘭達の隊が離れていく。これで、本隊の手勢は本当に数えるほど。

「あ、お兄さん。どうしたの？」

「ん？……ああ、許チヨか」

「季衣<sup>キイ</sup>でいいよー。春蘭さまと秋蘭さまも、真名で呼んで良いって言ってくれたし」

「なら、俺のこともかしこまらないで呼んでもらえると助かる。正直、お兄さんはむず痒い」

「じゃあ、兄ちゃんて良い？」

「ああ、それで構わない。さっきの質問だが少し砦の様子をな。華琳を守るにしろ相手の動きに注意しすぎることではない」

「そっか、兄ちゃんも護衛なんだっけ」

そう言つと季衣がうれしそうに微笑んだ。

「ああ、近づく敵はさっきみたいに吹き飛ばしてくればいい。季衣の届かないところは俺がやろう」

「うん！はは、さっきまで緊張してたんだけど兄ちゃんと話したらなんだか安心してきた」

「ふっ、そうか」

そう言つて士郎は季衣の頭をなでる。

「ひゃっ！……へへ」

「ん、驚かせたか？」

「ちょっとだけ。でも兄ちゃんの手は大きくて安心する」

「そうか」

「こら、その二人ー！遊んでないで早く来なさいよ！作戦が始められないでしょう！」

桂花が大声で士郎達に声をかける。士郎は皆に動きがないことを確認して、季衣の頭から手をどけた。

「ああ！すぐ行く！では行こうか、季衣」

「うんっ！」

「そして、今に至る」

「……なあ、桂花」

「なによ……あんたさっきからそれしか言わないじゃない！」

「すまん。だが、さっきの銅鑼はこっちが鳴らしたので間違いないよな」

「そうよ……」

「「はあ……」」

二人して同時にため息をつく。そこに華琳が声をかけた。

「……桂花」

「はい」

「これも作戦のうちかしら？」

「いえ……これはさすがに想定外でした……」

「連中、今の銅鐸を出撃の合図と勘違いしているのかしら？」

「はあ。どうやら、そのようで……」

「……そう」

（いくら盗賊だからってそれは……）

しかし、眼前に迫りくる人の群れを見るにそれしか説明できない。

「というより、奴ら全軍出てきていないか？ 砦から見張りが消えているんだが……」

「……なんだか挑発の言葉を考えていた私が馬鹿みたいじゃない。まあ、次に使えば良いことなのだけれど」

「華琳様！ 兄ちゃん！ 敵の軍勢、突っ込んできたよっ！」

「数に物を言わせるにしたってこれは……」

「……まあいいわ。多少のズレはあったけれど、こちらは予定通りにするまで。総員、敵の攻撃は適当にいなして、後退するわよ！」

華琳が指示を飛ばし兵達が後退の準備を始める。

（さて、これが何事もなく終わればいいが……）

そう考えながら、士郎は迫りくる賊軍の方に目を向けるのだった。

## 第九話 士郎にフラグが立ちました（後書き）

あと二話ぐらいでこの章は終りですかね。

次で何とか合戦終了まで行きたいです。

こっからフラグという名の種をばら撒いていきたいです。目標は桂花のフラグを立てること……無理です。でもツンツンだけで終わらせたくはないとひそかに思っていたり。まあそこら辺はおいおいということ。

今回はこの辺で。ではでは。

## 第十話 共に歩む者たち（前書き）

大変お待たせしました。 ほぼ二カ月がたとうとしています。

石を投げられないように頑張りますです。

## 第十話 共に歩む者たち

「うつつ」

「……」

「うつつうつつ」

「……」

うめき声をあげ必死で自分を抑えようとしている女性が一人。それを見て悦に浸ってる女性が一人。敵の後方を奇襲しようと軍と身を隠している春蘭と秋蘭である。

「うつつあああ！！もう我慢できん！！秋蘭出るぞ！！」

「まだダメだよ。姉者」

「しかし！こう、無防備な集団を見ているとな……軍とは何かを叩き込んでやりたくなって」

「気持ちは痛いほどわかるがダメだ。今行っても敵の側面しか突けない。作戦は敵の後背を突くのだ。そうしないと挟撃出来ん」

「わかっている！わかつてはいるのだが……あんな奴らが華琳様を後ろから追いかけていると思うと、な！！」

そう言って春蘭は怒りを露わにする。後日、秋蘭は姉が目を炎に変

え、その体から炎に似た闘気が噴出するのを見たと言う。

「む、むう……そう考えれば確かに腹立たいが、それも承知で華琳様は囷になったのだぞ？」

「わかつている……わかつているのだが……」

今春蘭の中では理性と本能が一騎討ちをしているに違いない。

「姉者頑張れ！あともう少しだ！あともう少しで敵の殿だ！我が隊も弓の準備を！弓隊構え！！」

「みえた！！春蘭隊！！いくぞ！！日頃の訓練を思い出せ！！混乱に飲み込まれるなよ！！」

敵の殿が無防備な後ろをさらした瞬間、虎の檻が開け放たれた。

「敵中央に向け一斉射撃！撃ていつ！」

「総員、突撃いっつ！！！！」

放たれた矢を合図に、春蘭隊が雄たけびを上げ、突撃を開始した。

「……さっきまでの勢いはどこへ？」

戦場は先ほどとは打って変わり一方的な戦いになっていた。

「はあああああ！！！！」

「ぶるるるる！！！！」

賊は季衣に空に向かって吹き飛ばされ、彼の乗馬の絶影ですらも賊を追い散らしていた。

「逃げる者は逃げ道を無理に塞ぐな！後方から追撃を掛ける、放つておけ！」

桂花が軍に指示を叫ぶ。実際先の奇襲で賊軍は混乱。本隊も反転して突っ込んだが抵抗らしい抵抗はほとんどなく賊軍は総崩れとなった。

「それにしても、作戦が成功したとはいえここまでもろいとは……っ！？」

刹那、士郎は嫌な予感が体を突き抜けるのを感じた。

（なんだ？一体何が……っ！！）

その時、崩れ崩壊している賊軍から一筋の矢が放たれた。

「華琳！！」

「え？」

油断。しかし、それはこの時に至っては仕方がない。何故なら矢は『流れ矢』ではなく間違いなく華琳に向かって放たれたのだ。

それも『崩壊していく』軍の『真ただ中』からである。苦し紛れの流れ矢ならともかく、明確な意思を持って放たれた矢は、あまりにも異常であつた。

「くう!!!」

「士郎!!!」

士郎はとつさに身を投げ出した。華琳をかばうように。士郎なら迫りくる矢を切り払えただろう。だが、この時それをしなかったのは直感が警笛を鳴らし続けていたからに他ならない。

ドスッ!

その矢は士郎の右肩に刺さつた。しかし、

「みつ、けた!!!」

士郎は正確にその『発射点』を見抜いた。そして、

ヒュン!!!

その『発射点』で的が横からの矢に爆ぜた。それは、噴水のように血を噴き出しながら、構えたままの姿勢でどつと地に倒れ伏した。

「士郎!!!」

「ふつ、俺は大丈夫さ。華琳は無事か？」

「あなたなんて無茶を……」

士郎は華琳の無事を確かめると静かに立ち上がった。幸い外套のおかげか矢は刺さったが、傷は浅く、大事に至ることはない。

「なにこの程度の傷、春蘭の一撃を受け止める方がよっぽど痛いさ」

「ふう、それだけ減らず口を叩けるなら問題ないわね。でも……」

華琳はそこで一息つくと、士郎を睨みつけ、

「次に自分の命を軽んじるようなことをしたら許さないわ。あなたの生殺与奪は私が握っているのだということを忘れないことね」

「ふつ、体を張って助けたのに酷い言われようだな」

「あら、助けてくれたことに感謝はしてるわよ？要はもっと方法に気を使いなさいということよ」

「肝に銘じておくよ」

「士郎、華琳様。ご無事でしたか」

「御苦労さま、秋蘭。見事な働きだったわ」

敵が周りからいなくなると秋蘭がこちらにやってきた。華琳は労いの言葉をかける。

「士郎が華琳様を庇った時は肝が冷えたが……どうやら大事ないようだな」

「ああ、まあそれについては華琳から散々言われたから、小言は無しで頼む」

「ふふ、なら貸しひとつだな」

「自業自得とはいえやれやれだな。それは置いて、秋蘭しかこちらに来ないということは……」

「当然、アレには追撃を命じたわ。季衣も一緒にね」

さすがに王佐の才は抜け目なかった。これで賊軍の芽は完全に断ち切られるだろう。

「ふむ、なら俺の隊は負傷者の収容に向かわせよう」

「わざわざ士郎の隊がしなくてもいいのではないか？」

士郎が副官に指示を出すのを見て秋蘭が話しかけた。

「俺の隊は華琳の護衛をして特に忙しくもなかったからな。俺もただ華琳の横で弓を撃っていただけだし」

「しかし……」

「それに、俺もちょっと見ておきたいことがあるからな……」

そう言つて士郎は戦場の跡が見える少し小高くなつた丘に馬を向けた。

「……」

そこから見える風景は凄惨たるものだった。死屍累々。あるのは人の死体、死体、死体……赤い夕陽に照らされる戦場の爪痕……

「つく……」

士郎はそれに顔を歪める。そこで屍となつた者たちはそうならなければならなかった。だが、望んでそうなつたわけではない……

「分かつていたはずなのにな……」

目の前の人間達は切り捨てられた犠牲。この時代における被害者。誰も好き好んで賊に身を落したりはしない。

「士郎？あなた何を……」

その背にかかる声があつた。そして、その声の主は彼の横に立ち、彼の顔を覗き込む。

「……あなた、今自分がどんな顔してるか……わかつてる？」

「いや……」

「戦いに負けたって顔よ。まるで自分が何も出来なかったかのように……ね」

「……」

彼女の言葉は静かに士郎の胸に刺さった。彼にとって、目の前の死体の山は救えなかった者たちであり、それはまさしく、彼にとって耐え難いものであったのだから……

「華琳……俺は」

「ふう……まさか敵でさえもあなたの守る対象になるとはね。少々誤算だったわ」

「……」

そう言つて華琳は彼の横から離れる。そして、何かを確認して士郎に声をかけた。

「士郎、後ろを向きなさい」

「え？」

「いいから！こつちを向きなさい！」

士郎は目を死体の山から自らの後ろに向ける。そこには……

『うおおお——』

士郎が振り返ると同時に、兵たちから勝鬨の声が上がる。

「これは……」

「あなたが守った……救った者たちよ」

「っ……！」

「誇りなさい、士郎！あなた無くして今回の勝利はなかったのだから！」

「俺は……」

「春蘭も秋蘭もあなたが私のそばにいたから、季衣もあなたが後ろにいたから、だから存分に力を発揮できたの。それはとても重要なことよ。そして……」

『うおおおーー』

「それは兵たちにとって生きるか死ぬかの境界線になりうる」

士郎は目の前の兵たちを見やる。皆が皆、興奮と誇りと、そして安堵の表情を浮かべていた。だからこそ、確かにそこに士郎がいたことで守れた者が存在した。

（俺は、もう少しで同じ道を歩もうとしていたのか）

彼が抱いた思い。それはかつて、自分がそうはならないと誓った道に危うく踏み出しかけていたことを意味していた。

（わかっていたはずなのにな……）

ふっと、彼の顔に笑みがこぼれる。

「華林、ありがとう」

「え？」

「俺はもう大丈夫。これからはもう間違えない」

そこには満面の笑みを浮かべた士郎の顔があった。彼はやっと見つ  
けられたのだろう……自分の道を……

「っ!!」

「どうした？華林？」

「な、なんでもないわ」

華林はその笑顔に当てられ、思わず顔をそむけた。その顔が赤かつ  
たのは果たして夕陽のためか……

「華林、俺は君の覇道を助けるよ。この身をかけて」

「!!……ふふ、当たり前よ、正義の味方さん？私に使われる覚悟  
はできて？」

「ああ、存分にな」

そして、二人は互いに笑いあいながら軍の元に戻る。

こうして霸王と正義の味方は共に同じ道を歩き始める。

そして、これを機に、曹孟徳は躍進を続けていくことになるのだった。

## 第十話 共に歩む者たち（後書き）

これで終わりに見えるじゃろ？この話はもう一話だけ続くんじゃ。

ホントに申し訳ないです。とりあえず賊退治のエピソードと幕間をはさんで黄巾の乱に入ります。そこからやっとオリキャラを出せそうです。もちろん他の勢力の皆さんもね。

とりあえずこの遅筆を何とかするのが当面の課題ですが。ではでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5101q/>

---

Romance of Three Kingdoms? with Fate ~ 衛宮士郎伝 ~

2011年8月1日22時53分発行